
エンドレス ストーリー — 『もし』 —

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレス ストーリー — 『もし』 —

【Nコード】

N5032Z

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

『もし』——主人公になれるのなら、世界を救いたい。

『もし』——主役になれるのなら、君を護りたい。

『もし』——最強ならば、歯向かう全てを壊したい。

あの日を境に、少年の人生は二百七十度急変する事となる。

子供を車から救って他界と言う、珍しく活躍した少年——如月和人は三途の川へ。其処から天国へ、行くはずだったのだが——其処で和人は自称神様と出逢う。この神様との出逢いが、和人の人生を大きく変えたのだった。

『君、主人公になってみないかい？』

その問い。甘美な響き。そして幕開けたのは和人の物語。

異世界？エルディアンテ？に転生召喚された和人を待っていたのは、RPG宜しくの世界所か、最悪な世界。戦争も巻き起これば、奴隷制度何てのも存在する。人種差別がある国もあれば、小さな紛争が巻き起こり続ける国もある。そんな世界の中で、和人は何を見付け、何を掴み、何を得るのか――。これは和人による和人らしい和人の物語。異世界トリップ主人公最強系物語此处に開幕、乞うご期待

不定期更新、更新遅延です。R15程度の性描写や残酷な表現が登場します。苦手な方は即座にバックブラウザ。大丈夫な方は右手に珈琲でも持ちながら暇潰しにお読み下さい。それではどうぞ。ちなみに主人公無双、ヒロイン無双もありますので、宜しく願い致します。それではどうぞ（朗報朗報、現在合計アクセス数7500突破、これからもどうか宜しくお願い致します）

物語主要用語紹介（前書き）

はい、どうも。

何故か此処に出来上がったこの物語。

何と今までにない作品を、ですって。

どうなるんでしょうか？

では、新作をどうぞ

物語主要用語紹介

『エルディアンテ』

主人公の召喚された異世界。

合計六大陸に分裂しており、それぞれがそれぞれで役割をこなしている。

？東方大陸

？西方大陸

？北方大陸

？南方大陸

？中央大陸

？浮遊大陸

何処の領域にも納まらないのが浮遊大陸で、周期をかけて世界を巡っているのだと言う。

十年に一度世界に勇者が召喚される事となっており、丁度主人公は十年目で召喚されたのだと言う。主人公は東方大陸に召喚される事となる。

『第六血盟』と呼ばれる大陸を司る頂点達の集まる集会もあり、これに出席するのは皆『^{ルシア}司界者』と呼ばれる者達だけである。『司界者』は百年に一度の割合で交代が為され、『司界者』の力は軍神と呼ばれる召喚獣をも一撃で殺す力を持つと言う。

マテリアル・ワールド

『物質世界』

地球の、それも人間界を指す言葉。

物質や法則で完全支配された世界の事を指す単語。

十年に一度、勇者として召喚する為の媒体でもある。

ルシア・デ・ルエート・アティブネス

『司界者介入禁止令』

司界者を決して戦争に介入させてはならないと言う皆で決定した法

律。

破った者には神の鉄槌と言う恐ろしき罰が待っていると云う。神の鉄槌は天上の裁きと言う話もあり、天上の裁きを受けた者は欠片一つも残らず消え去る運命とも言われている。

『魔力』

常人には不可能な手法や結果を実現する力の源。
自然界に満ち溢れており、精霊の力とも呼ばれている。

『魔法』

魔力を媒体として発動する超常的克神秘的な力。基本的に黒魔術と白魔術に大分類されるが、この分類は便宜的な物で、実際時魔術や空間魔術等も存在するため数は不明とも言える。

文化文化、居場所居場所で魔術発動条件は違い、それが自然界の精霊に干渉する事で発動する魔術と、自然界に干渉するだけで発動するかの違いや、神への祈りや誓い、生贄により発動する犠牲儀式魔法なども民族間では存在したりもする。一般的に魔法は『マジ』や『マジエスタ』と呼ばれ、魔法相殺、魔法発動無効化装置等が今では存在する。『水晶』^{クリスタル}と呼ばれる魔力により生成された魔力の塊を媒体に発動する事も可能。他にも『妙技』や『珍技』、『魔道』や『魔導』とも呼ばれる力でもあるが、それはやはり文化の違いとも言える。

『スベル 詠唱』

魔法を発動する際に捧げる言の葉。
長ければ長い程、その魔法の級は高く、威力も大きい。

『アーツスキル 技巧能術』

剣術、槍術、弓術、武術、流術を指し、技としてそれを確定する為の能力手段。

魔法を持たない者は、この力を強力化させ、単独でも最前線を戦い抜ける様に日々訓練を怠らないと言う。相当なスキル所持者は最前線でも主力を張れる程。

『王政国家マスケルディア』

通称『王国』。時代の波に飲まれた悲運の国ともされ、伝説にも残る霸王の血統を引く『朱覇^{しゅぱ}』司界者エルシェアⅡロンⅡスザクがマスケルディア家興したのを発祥とする、由緒正しき国家。霸王の遺産『朱覇の指輪』を代々受け継ぐ三国の一つ。同盟国や属国は多く、関係は概ね良好。一部を除く。人口約3000万人を誇る国家で、エドヴィンと呼ばれる一騎当千にも及ぶ朱天騎士を保有する強国でもある。しかし、建国から350年の時、隣国であった『皇帝国家テンペシア』の滅亡により、領地拡大するもその分、王国を滅ぼし、その領地を全て得ようとする国家との戦争により、第一時期のマスケルディアは滅亡。そして新たにマスケルディアとして建国された現在は概ね関係良好、領土もそこそこと言った状態で存在している。

『皇帝国家エスペンティア』

通称『皇国』。一度帝国に滅ばされたテンペシアの復興後の姿。消失を遂げた国家とも呼ばれており、もう一つの霸王の血統を引く『碧覇^{へきは}』司界者ラヴニアⅡアスケルⅡゲンブが存在し、霸王の遺産『碧覇の断片』を保有する国家。同盟国と言つか連合国『連合国アスケメディア』の軍を駐留させようとした親アスケメディア派が武装蜂起。この隙に乗じて『帝政国家アルトレスト』軍が侵攻し、内乱状態にあった皇都エスペアを包囲する。だが、それから数日後、謎の大爆発により当時のテンペシアは滅亡した。エスペンティアはテンペシアの残骸を排除する代わりに戦死した者達や罰初に巻き込まれた民間人を供養する儀を行い、皆を納める教会を造り上げた。ヴァスタと呼ばれる第一王子も程無くして戦死する。そしてテンペシアは完全滅亡したと言う。現在エスペンティアの人口は2500万

人弱を持ち、中にはテンペシアの生き残りも存在するらしいが、見た事はないと言う。

『帝政国家アルトレスト』

通称『帝国』。全土に覇を唱える最強の軍事国家。最後の覇王の血統を引く『黄覇』（こっは）司界者エスケアⅡルアⅡビヤツコが存在し、覇王の遺産『黄覇の契剣』を保有する国家。東方大陸の大半を領有する強国で、元は『エスシア連邦』と呼ばれる『アルトレスト』。『ヴァイツ』。『コーディアンツ』の三大陸に跨る連邦大陸の都市国家の一つに過ぎなかったが、共和制、帝政と政治形態を変える過程で本格的な軍事国家と化し、今やエルディアンテで、一、二を競う大国となった。建国当初から協議制が根付いているため、国内の法制度は先進的克合理的。階級差別や奴隷制度は存在はする物の、市民の生活水準は極めて高い。実力で上の級に上がる事も許可されている。技術大国として発展した国家は、様々な軍事兵器を所持しており、空中浮遊要塞『要塞艦隊』（ホルモア）や『軽巡艦隊』（シヴァ）、『殲滅要塞』（ルシフェル）等といった要塞艦隊が多く空中を浮遊している。人口は4000万人と大陸の中ではダントツでもある。

『神徒国家ヴァルエルータ』

通称『神国』。エルディアンテ全土に伝わる宗教、『サスティヴァ教』の聖地。厳密には国家とは言えないが、一応政治形態や軍事形態が整えられている為、国家として扱われている。あくまでサスティヴァ教修行の地である此処は、政治形態が整っているとは言え、其処まで深くなく、教団支援者や多額の寄付金を難民の救済に務めている、どちらかと言えば非政府的機構国家。また、大僧正がマスケルディアとアルトレストの王位継承に関わる立場に居る事から、ヴァルエルータは国際情勢に対して一定の影響力を持つ。

『学術国家エルグラス』

通称『術国』。覇権を狙う魔法に置いては相当の実力と実戦経験を持つ国家。霸王の血統を引く『蒼霸』そうは司界者スサナⅡエルⅡソウリユウが存在し、霸王の遺産『蒼霸の盟壁』を保有する国家。エルデアンテ大陸のアハト大砂海を越えた先にある西を納める大国。大陸中央に広がる平野部を領土とし、諸氏族の連合体として誕生した国家。国の殆どが魔法を扱える人種で、魔法を所持し、騎士にも立ち向かい、歯向かう、戦える部隊を『蒼空魔団』ラウルスカイズニエーカーを保有する珍しい国家でもある。覇権を狙う国であるが、アルトレスタ帝国との戦争で大敗。現在は劣勢に立たされている。軍国化制度の軍事組織を基本とした国家で、帝政政治形態を持つ。人口は1500万人と少なく、その約過半数が魔法使いである。

『連合国家アスケメディア』

通称『連国』。様々な諸国家群と、諸氏族の連合体として誕生しか国家。霸王の血統を引く『紫霸』しは司界者マテラⅡリアⅡイズナが存在する、いや、と言うより、存在してくれた珍しい国家。故にこの国家はマテラにより建国された国家とも言え、マテラの『国家を纏める国家』の案から生まれたともされる。解放軍と呼ばれる軍事組織を持ち、人口はおよそ1000万人。その内の三割は解放軍として最前線に立ち続けている。解放軍とは奴隷として扱われる民族人種、国家の解放を狙った外交圧力組織。エルデアンテ全土に解放軍は地下組織として存在するも、アスケメディア程の実力者の集う解放軍は中々存在しない。

『浮遊国家イエシニクリ』

通称『浮国』。危うい自由と解放に浮かぶ中立国家。霸王の血統を引く最後の者『黒霸』コクハ司界者マサムネⅡデⅡミハトハバキと呼ばれる最後の血統者を存在させる、霸王の遺産『黒霸の魔晶』を保有する浮遊国家。連邦時代から続く自治的国家で、サスヴァーン侯の手腕に自治問題が掛かっている。現在の元首はレルヤⅡハルⅡサスヴ

アーン七世。魔法の蓄積された水晶の源でもある『魔晶』の産出する唯一の魔晶鉱を保有する。この魔晶鉱も管轄の内であり、無許可の密猟は禁止され、した者には罰が与えられると言う。近代の政治形態は帝国よりで、だが、帝国から人々を解放しようと言う意識は変わらず、解放軍の組織と連絡を密通している。中立の立場から人口800万人での停戦調停と称しつつ、己が国に有利な情報を発表した。その為、現在は中立国家と言うより、王国に良好な関係を築く国家とも言える。

主要登場人物紹介

『登場人物紹介』

名前：如月和人 | Kazuhito Kisaragi |

年齢：18歳

職業：高校生

身長：178?

髪色：黒髪ストレート

瞳色：藍色

口癖：『やれやれ』

種族：『人間』
ヒュニム

台詞：『悪いね、これが俺だよ』

能力

ファンタジネット・クリエイター

『空想具現者』

インフォルテイオ・サーバー

『情報会得者』

付属

ロンド・ザ・フィクション

『霧消輪廻』

変貌

『殺刃鬼』

性格

一般高校に通っていた普通で健全な男子高校生。

無論、無能力者の魔法使用不可能の人間。

しかし、交通事故に巻き込まれ他界。天国に行く前の三途の川で神

ロンド・ザ・サモン

様と出逢い『輪廻召喚』により異世界に『勇者』として召喚される

エルディアンテ

事となる。

頭脳も運動神経も普通だが、その手先の器用さと、発明力、行動力、

反応速度は一級品らしい。

何度もバスケ部や剣道部にスカウトされたが、断って来たらしい。

余り怒らない性格だが、コンプレックスである『女顔』と『木偶の

坊』を言われるとキレる。怒らせてはならない伽羅で、極度のサデ
イスト鬼畜悪魔化する恐れがある。通常時は優しく、温厚で、人当
たりの良い人物なのだが、豹変するとはこの事である。剣術に心得
があり、流れるような舞う様な戦闘をこなす事も出来る人物で、時
折相手を煽る様な、それでいて馬鹿にする様な口調を見せるときも
ある。政治経済倫理系統に強い為、世界では飲み込みが早い。己よ
り幼い子に好まれる為、神様に『ロリコンヤロウ幼女趣味』と言われる事が多々あ
り。

異界、それも己の作り出した意志や願い、想いや希望、祈りにより
造られた世界にて、憎悪や殺意の結晶体である『俺』に出逢い、全
てが変わって行く事となる。

名前：無し

年齢：不詳

職業：第零番創造神

身長：不詳

髪色：金色ロングストレート

瞳色：碧眼

種族：『人間』

台詞：『脇役じゃないよ、主役になるんだよ。君は』

能力

ギフ・ユウ・ギフ・ミ

『受渡受取』

アルミア・スキリオ・アビリティアーズ

『億万長者』

性格

言っては悪いかもしれないが、ぶっ飛んだ発言もしつつ、真面目な
馬鹿。

和人を異世界に転生召喚した張本人で、和人に能力を与えた者。彼
に情報を渡しつつ、彼の援助支援をする者。本人曰く和人は『勇者』
ではなく『主人公』らしい。

優しく、母親の様な存在でもありながら、子供の様な性格の持ち主。

神出鬼没に現れては、消えて行く存在で、必ず彼にアドヴァイスする為に異世界に舞い降りる。携帯電話を異世界でも神様とだけ通じる様にした者でもある。

名前：カルラールグースウェーツアルト

年齢：23歳

職業：マスケルディア騎士団第一騎士隊長

身長：182?

髪色：白銀セミロング

瞳色：真紅

種族：『吸血鬼』
デイヴァンピア

台詞：『私が此処に居る限り、此処は通さない』

魔法

メス・ティ・エルファイア

『紅蓮業火』

ビルディアアクト・マジエスタ

『肉体強化』

性格

騎士団の第一番部隊長を務める『スウェーツアルト侯爵家』の坊ちゃん。

腕前も魔法の威力も相当な物で、流石第一番の隊長を務めるだけの事はあると言いたいのだが、実戦経験は少なく、命令口調とその高貴さ、そして家柄の違いと言う事で周囲の皆は中々彼に近付こうとはしないでいる。熱心な勉強心を持つ姫様一筋の一途な青年でもある。

酒を飲むと泣き上戸になる面倒な性格の持ち主だが、実際優しく、その優しさは中々外に出せないだけであるのかもしれない。主人公とは最初の頃は好敵手関係だったが、仲良くなり、後に好敵手しんゆうになる事となる。

名前：アルテミシア・デ・マスケルディア

年齢：15歳

職業：王政国家マスケルディアの姫君

髪色：金色のロングで、ふわっふわとしたツインテールの髪をしている

瞳色：碧緑

種族：『エリ阿斯霊瑛』

台詞：『ふ、ふふふ、これじゃ！！　これを待っておったのじゃ！！』

魔法

『バーフェショナル・ブリジエスタ絶対零度』

『ネス・ア・ネスト・ダークネス深淵闇墓』

性格

孔明快活で運動神経抜群克頭も良いのだが、能天気のマイペース姫様。

主人公を慕い、勉強を嫌う性格。将来有望と言われているが、どうなのかは不明。

楽しい事、楽しい物、面白い事、面白い物を好み、自分を『井の中の蛙』の御姫様や『何も知らない』御姫様と見られる事を一番嫌う。撫でられる事を好み、いつでもその笑みを浮かべている。唯一の主人公の理解者でもあり、孔明の畏とやらに引っ掛かってみたいと言っていた御姫様でもある。楽しい物を見ると目が絢爛に輝く。

名前：シエナ＝デル＝シルシファール

年齢：17歳

職業：王政国家マスケルディア騎士団第一騎士副団長

髪色：淡い桃色混じりのセミロングの銀髪

瞳色：淡い桃色

種族：『アニマルディ獣人』

台詞：『私の戦いだ、手出しは無用』

魔法：無し

技巧能術

『騎士剣術』

『流式剣術』

性格

気高い女性の騎士で、副団長を務める猫耳と猫の尻尾を持つ。

孤高の騎士で、優しいが、戦闘になると、模擬戦でも相手を殺しに掛かる程。弱みを握られると弱い性格で、実は若干マゾ体質持ち。

運動神経は良いのだが、運動神経だけで、頭は馬鹿。

脳筋と言うべきだろうか、此処まで来るとそれ以外浮かばない。幼き頃に両親を殺しており、年上の男性に

名前：アルケスⅡヤウⅡエルケディウム

年齢：21歳

職業：王政国家マスケルディア騎士団第三番第四番部隊長

髪色：藍色のセミロングの髪

瞳色：淡い藍色

種族：『人間』

台詞：『我等としても、此処は通すわけには行かのだよ』

魔法

ウエボニア・ラ・マジエスタ

『武器強化』

技巧能術

『騎士剣術』

『王政剣術』

性格

温厚で人当たりの良い騎士団の第三番第四番と呼ばれる『魔銃』ウィッチクラフト所持部隊の部隊長を務める男。まだ若く、将来はカルラ騎士団長の様になる事だと言う。

剣術、魔法共に扱える万能型で、子供達に人気が高い。頭も良く、運動神経も良い為、策士としても特攻隊長としても行動可能。その行動次第では第二番に昇格出来る見込みもあると言う。

和人とは親友となる人物で、和人の故郷の歴史や世界観に惹かれる。

能力武装兵器紹介

『能力紹介』

ファンタジネット・クリエイター

『空想具現者』

空想した物全てを具現化可能。

兵器だろうが、武装だろうが、宝具だろうが、能力だろうが、技巧能術だろうが扱える。が、魔法は別で、魔力のない彼には魔法は扱え無い事となっている。

インフォルティオ・サーバー
『情報会得者』

全ての情報を知る能力。

空想するには空想する媒体がなくてはならないとの神様のアドヴァイスにより授けられた第二の能力。見た物、聞いた物の全ての情報を得る事が可能。

触れた物については製造年度から今までの所持者、過去経歴、戦歴、ステータス、製造法、製造場所から全て知る事が可能。

『武装紹介』

ウィッチクラフト

『魔銃』

ディヴァイン・バレッツ

通称『魔女狩り』とも呼ばれる『魔弾』（魔力の込められた弾丸）を放つ事の出来る特殊な銃。最大装填数は大きさによって決まり、20センチ尺の魔銃は最大6発。30センチ尺が9発となっている。放たれる弾丸は全て違い、所持者の込める魔力の元素によって炎属性の弾丸や雷属性、氷属性、闇属性の弾丸と変化する。魔銃所持者は大体が騎士団の遠距離部隊に所属しており、その分逃げ足や隠れる事が上手いが、近接戦になると毛頭弱いのが欠点とも言える。

ガン・ソード
『銃剣』

銃と剣二丁を一気に扱える一石二鳥の武器。

銃弾を放つ事も出来れば、叩き斬る事も出来る。中々扱い慣れるまでが長く、臨機応変に対応しつつ攻撃方法を変えて行かなければならないのが難しいと言われている。

ヴァイブリジット・ブレード

『振動剣』

刃の高速振動により相手を叩き斬る高速振動刃付属の剣。

最前線に立つ者はこれを短剣やナイフとして所持し扱う。

その振動する刃に属性を付属させる事も可能で、それを出来るのは相当な魔力所持者だとも言われている。

ザ・レールガン

『直雷進撃』

雷の纏った魔弾を超高速で連射する事を可能とした遠距離最強とも言える砲台。

城砦や要塞に装備されており、これで空中要塞などを撃墜させると言う。

しかし弾丸に込める魔力が多い者で無い限り魔力不足で倒れる可能性があるので、危険性も伴う危険極まりない遠距離最強武装。

『兵器紹介』

サファギオント

『霍乱爆撃機』

浮遊し空中で敵の攻撃を霍乱させ、爆撃により攻撃する戦闘機。

小型故に小回りが利くのが最大の特徴で、敵の連射でさせ避けられる性能を持つ。

操縦士が上手ければ上手いほど実力を発揮する機体でもある。

シヴァ

『軽巡艦隊』

優美で流れる様な曲線が特徴的な軽巡機体。シヴァの様な軽巡機体はまだ生産が始まったばかりの新艦隊で、最前線に配備される。その機動性と速力に優れているが故、人員輸送等でも扱われる機体である。

『ゴルモア要塞艦隊』

圧倒的火力と防御能力を持つ巡洋戦艦の最強機体。厚い装甲と強力な火力を有し、対地攻撃力に優れる。過去にエルドニア城塞での闘いや、ビーヴァニアと呼ばれる諸国家群の襲撃事件などで帝国軍主力艦隊として活躍している。

『ルシフェル殲滅要塞』

第貳番隊に配備された巡洋艦。ゴルモア級ではないが、不足している周囲の軍艦の火力を補うべく、対艦攻撃力と速力を重視して造られている。艦隊行動中には砲撃戦で敵艦隊を牽制し、支援を行う事が多い。

『エルバルクル衛生要塞』

第四番隊に配備される、軽巡洋艦の艦。軽巡洋艦のわりに高い防御力を誇り、負傷した者達を治療したり、援護射撃を行ったりする事が多い護衛期待でもある。

第零話 If（前書き）

さてさて、序曲。

どうなるのでしょうか？

『もし』——読者様なら何を思いますか？
それではまずは三人称でどうぞ

第零話 If

『もし』——主人公になれるのなら、攫さらわれた御姫様を助け出してみたい。

『もし』——主役を張れるのなら、『君』と言う存在への想いを貫き、護り抜いて見たい。

『もし』——最強の力を得られるのなら——どうするのだろうか？
敵と言う敵を薙ぎ倒し、屈服させると言うのも悪くはない。

だけど、最強である事を嘆きながら、悲哀の中で人々から救世の英雄と讃えられるのも悪くない。

勿論、当時の彼に最強の力も、主人公になれるハズの度量も、主役を張れるハズの体質、スター性もなかったし、歳相応の彼の世界は狭かった。だからこそ、この『もし』を気楽に思えたのかもしれない。

崩壊と再生の戯曲ドラマを、唯の二次創作フィクションとして捉えられていたのかもしれない。

嗚呼、あの頃の自分を殴ってやりたい。

『主人公』『主役』『最強』。

神様は本当に舞台が好きらしい。少年心をくすぐる甘美な響きでもあるのだが、この三単語は確実に『舞台ゲーム』を成立させる為の単語でもある。

最強の魔王を倒す主人公。

主人公を待ち構える魔王。

そして唯、流浪に流離さまよい、世界を孤高の精神で旅しながら主人公に助言や手助けをする主役。

彼がまだ中学生の頃、王道にも王道な『勇者が魔王』を倒す、と言うゲームが流行っていた。

まあどのゲームもそうなのかもしれないが、その魔王の性能が鬼畜故、クリア出来た者は一握り程度しか現れなかったと言う一種の伝説のゲームだ。彼は無論、クリアしたのだが、クリアするまで約6カ月も掛かってしまったのが誤算だ。こんなに掛かるとは思っていなかった。

だが、クリアした時の爽快感と達成感は半端ではなく、ついつい部屋の中で歓喜の声を上げてしまう程。

それこそ勇者のレベルを最高値まで上げて挑んだ。その時の勇者こそ『最強』だったであろう。最強の魔王と最強の勇者。雌雄は中々決さず、結局勇者の粘り勝ちだったのが鮮明に記憶に残っている。そう考えてみると『最強』も実は弱く、脆弱なのではないかと思ってしまう。雑魚相手なら文句を言わせない力を持つが、同じくらしい力を持つ相手が相手すると対等。下手をすれば負けてしまうかもしれない『最強』。それはもう『最強』ではなかるうか？

しかし違っていた。

彼は唯、知らなかったただだったのだ。

『最強』の力を得た、『最強』の者達の想いを――。

そして彼は告げられる。

色取り取りの花々が彩る大地で、

その凜とした声で、

鐘が鳴り響く中、告げられる。

「君、主人公たけななになつてみないかい？」

その日、彼の日常は完全に崩れ去った。

これは約、彼が終わってから2時間後の物語である。

第一話 Loss of life

そもその始まりは、彼女との出逢いまで遡る。さかのぼ

「あゝ、寒い……っ」

新人生の最後の高校説明会準備終了後、彼、如月和人はマフラーで顔の下半分を覆い、凍て付く様な寒さに耐えながら帰路に着いていた。

考えて見れば、来年には高校三年生。大学受験にも将来にも現実味が増す。いや、今のこの時点で大学受験については現実味を帯びていても可笑しくはないのだが、彼の場合、校長推薦を得られるが故に、特に深くまでは考えていなかった。

鞆の中には筆箱と推薦入学についての書類、それと就職案内の書類が入っている。

「俺は高卒就職何て危険極まりない真似はしませんよってな……」
「やれやれ、と受け取った就職案内の書類の入った鞆に目をやってから肩を竦める。」

「……」

子供が、少女が遊んでいた。

勿論、この季節なのに外で遊ぶ事は良い事だと思うし、元気なのは健康な証拠なのでとても良い事だとも思う。

思うのだが、

「こんな所で遊んでると危ないよ？」

流石に車通りの多い中央道の歩道でボールを蹴っているのは危険極まりないと思う。

「？」

「ほらほら、せめて公園とかでやりなさい、ね？」

我ながら母親染みた台詞だなあ、と思いつつ、和人は少女に目線の高さまで腰を落とし、首を小さく傾げて見せた。

「はい」

「ん、良い子だ。きっと親御さんも良い親なんだろうな」

腰を上げ、和人は着込んでいるモッズコートのポケットに手を突っ込んだ。

「あ、……」

「え？」

背後で何かを見付けた様な声が耳に届く。

気付けば、少女が飛んで行ったゴムボールを追う車道に――。

オオオオオ、と言うマフラーを抜ける改造した車独特の甲高いエキゾーストノートと共に、高速でもないが相当な速度で車道を平然と駆け抜け、少女に迫る車――。

「あ、んの、馬鹿……――ッ!」

気付けば体は動いていた。

地を蹴り、沸き上がる悲鳴と、急ブレーキを掛けるも止まらずゴムの焼ける臭いと音が響くそんな空間の中を駆け抜けて――。

少年の意識は彼岸に飛んだ。

「……あれ？」

何故か己の体が目の前にある。

「……あるえ？」

何故か己の顔が目の前にある。

何故か己の肉体から切り離されている。

「……所謂幽体離脱いわゆるって奴か、これ……？」

いや、違つと脳内が否定する。

「じゃあ……、俺、死んだ、のか……？」

そつだ、と脳内が肯定した。

「……まだ18歳だつたのになぁ」

ようやく

漸く、大学進学も将来も現実味を増して、未来のヴィジョンが見得て来たと言つのに、此処で終わつた。

「はぁ……、つて、うおっ、か、体が、浮いた……、ぞ……？」

徐々にこの仮初の肉体が、己の倒れ臥せている血塗れの肉体から離れて行く。それどころか地面からも離れて行く。

「……時間、つてか……、成程ね……」

何故か冷静で居られる。己の体に時間がないのが手に取る様に分かつた。

街は次第に小さくなつて行き――、

見得なくなつた。

第二話 舞台で舞い踊るのは……

利根川だった。

「……いや、違うだろ、利根川、じゃあ、ないよな……、此処」

轢き殺された和人は、何故か分からないが巨大な川の前に居た。それこそ利根川級に川幅も大きく、長そうな川。

「……夢、じゃあなんだよな……」

試しに頬を抓って見る。

「ひゅめひゃない、な……」

翻訳すれば『夢じゃない、な』なのだが、それはどうでも良い。唯、分かった事は夢ではないと言う事だ。

「じゃあ此処、何処だよ……」

川を見詰めながら溜め息を吐く。

「此処は三途の川だよ」

凜とした声だった。

「え……、つて、アンタ、誰……？」

見知らぬ相手にアンタ、と言うのは失礼かもしれないが、目の前の、金色の長い、美しい髪を靡^{なび}かせ、髪が風に踊る度に露わになるエメラルドの如き輝きを持つ碧眼をした彼女は余り気にして居ない様で、軽く笑いながら「私は神様だよ、第零番創造神」と言っていた。

「へえ、神様ねえ……つて、神様……？」

頷いて頷いて、嘘と言った表情をする和人に、自称神様は「嘘じゃないよ？ 何なら君と言う存在を消すって言う方法で証明してみせるけど？」と首を小さく傾げた。

「いえ、遠慮します、はい」

高速で土下座モードに以降した彼に自称神様は「別に良いよ、大

体の人はそう言う反応するからね」と苦笑した。

「成程……、それじゃあ、聞いても良いか……、ってか、良いですか？」

「今更畏まらないでよ、やり難いから。で、何？」

「俺は、死んだのか……？」

数秒の間、そして静寂と沈黙は彼女の一言で打ち破られると共に、彼に真実を告げる。

「死んだね、死因は事故死だよ」

再び間。

沈黙。

静寂。

「そう、か……、納得行つたよ。で、俺は天国？ 地獄？ それとも神流し？」

苦笑しつつ漸く告げられた真実に納得し、彼女に首を傾げた。

「え、違つよ。君は珍しく良い行いをしたからね、最上神トッがご褒美つて事で、君を転生させる事にしたんだ」

「……へ？」

待て待て、いや待ってくれ、と和人は首を横に振った。

「転生？ 俺が？ てか珍しくつてのは余計だわっ」

其処かよ、と突っ込まないでやって欲しい。

「そつだよ？ 場所はまだ決まってるじゃないけど。ま、私が決めるよ、

「適当にね」

「投げやりだな、オイ」

「適当かよ、と溜め息を吐いて「ほら、行くよ？」と手招きしては歩み出す自称神様の跡を着いて行く。

三途の川を左に行き、花畑を抜け、森を迂回し、草原を超えて、辿り着いた場所は巨大な、RPGに登場しそうな古惚けた焦げ茶色の扉が8つ程立ち並ぶ、奇怪な場所だった。

「此処は……？」

「転生の間、所謂死んだ人間でも転生許可が出た者だけが来れる特別な場所だよな」

「転生、の間……、RPGホント宜しくだな……。で、俺は何処に飛ばされるんだ？」

「んー、まだ確定してないけど、もしかしたら異世界かもね。って、言うか何で君そんなに冷静で落ち着いてるわけ？」

「え……」改めてその己の落ち着き様と冷静さに気付いたのか、和人は小さく声を漏らしてから肩を竦め「自分が死んだ事に納得が行っちゃったからかもしれない……」と続けて「ま、転生するならまた別の場所でも生きられる。その時は人間らしさを持って生き抜くさ」と笑った。

「ふうん……つと、……転生場所は、……異世界、んー、君はお節介に恵まれているんだね」

「は？」

「君を、ってか勇者を求めてる、救援を求めてる国があるの。場所は異世界エルディアンテ。魔法も技巧^{アーツスキル}術も存在する世界だよ」

「RPG好きだな、ホント」

「当たり前さ。魔法のないRPG何て興奮めだよ」

「……まあ、置いておいて、俺は其処に転生するのか？」

その問いに彼女は唸ってから「此処は『輪廻召喚^{ロンド・ザ・サモン}』にしようかなって思ってる」と和人の目を、その碧眼で見詰めた。

「『輪廻召喚^{ロンド・ザ・サモン}』……？」

「うん、一種の転生召喚。君をその世界に召喚すると同時に違う世界の住人として転生しちゃうの。言っちゃえば同時並行かな」

「ほー……、でもさ、俺魔法も能力も何も持っていない一般人だぜ？んな世界に行っても助けられる見込みが……」

「あー……、それもあつたね。まあそれは私が解決するよ。ちよつと来て？」

「ん？」

首を傾げる和人を他所に、神様は彼に歩み寄り、その頬に触れ――

「二つ、上げるよ」

そのまま顔を近付け、そつと静かに唇を重ねた。

「――ツツ！?!?」

突然重ねられれば声も出せず驚き、己の服を握る彼女を押し飛ばすわけにも行かず、唯、時間が経ち、離れるのを待った。

ほう、と、吐息と共に唇が離されれば、一瞬頬を染めた神様が直ぐに平静に戻り「渡したよ、能力二つ。君にピッタリの能力だと思う」と告げた。

「……あ、ああ……、で、そ、その能力、って、言うのは……？」

未だに唇に残るあの柔らかな感触に顔を真っ赤に染めている和人に神様は苦笑しつつ「一つは『ファンタジネット・クリエーター空想具現者』。空想を全て宝具だろ

うが能力だろうが兵器だろうが具現化出来る完全違反能力。フルチェートで、もう一つが『インフォルティオ・サーバー情報会得者』。空想するにも情報は必要でしょ？ その

情報を全て得る能力だよ、見た物聞いた物の情報を全て知り、触れた物の扱い方から情報、過去まで知る事の出来る完全違反能力パー トツー」と頷いた。

そして速攻で、

「俺をどうしたいんよ!?!」

突っ込んだ。

「いや、だって君、キスしたら伝わって来た情報でだけど、発明力とか想像力は高いみたいだし。なら空想を具現化する何て簡単じゃないかなあって」

あはは、と笑う自称神様に彼は溜め息を吐いて、やれやれ、と肩を竦めてから「ま、有り難く使わせて貰うよ」と続け、苦笑し返した。

「それじゃあそろそろ時間だね、最後に問うよ」

「嗚呼、何だ？」

「君、主人公（なうきょうしゅ）になつてみないかい？」

風が吹き抜ける。

声が出ない。

「え……」

「そつだよ、主人公。今あの世界は主人公が居ないからね。いや、一応居るけど皆独壇場での独りよがり。完全遊んでいるだけみたいな。だから君みたいな主人公が必要なのさ」

主人公。

『もし』なれるなら、と思っていた一つ。
主人公（さいきょうしゅ）。

『もし』そんな力を得られるのなら、と思っていた一つ。

それが今、両方得られ、なれるかもしれない。
掴めるかもしれない。

求めていた物が、目の前にある。

世界を救えるかもしれないその力。

救世の英雄と讃えられるかもしれないその力。

だが——違う気もする。

それで良いのか、と誰かが言っている。

それが良いのか、と誰かが尋ねて来る。

「……、俺は……」

そんな物で良いのか、と誰かが聞く。

それが求めていた物なのか、と誰かが問う。

それを欲していたのか、と誰かが吐く。

「俺、は……」

「ん……？」

舞台上上がるのは、主人公だけの役目なのか？

舞台上踊るのは、主人公さいきょうだけの役目なのか？

舞台上歌うのは、主人公だけの役目なのか？

違う。

「俺は……、主人公にはならない——だけど、舞台上で舞い踊るのは、主役でも良いハズだ」

それが答え。

主役は必ず舞台上で舞い踊れると言っわけではない。

もしかしたら主人公より役目は薄いかもしれない。

それでも、彼は選ぶ。

その修羅の道を。

「つづ、はははははははははは、主役ね、成程。良い事を聞かせて貰ったよ。君らしい答えだね、如月君。それじゃあ、君には主役として、舞い踊って貰うよ。あの用意された舞台上ね」

大笑いしてから、小さく笑みを零しつつ告げる自称神様が一つの大きな扉を押し開けて、

「此処が君の行く世界の出発点だよ」

「え、……、此処、なの……？」

「そうさ、此処が出发点。そうそう、君の携帯、ちよつと弄つて私
とだけ繋がる様にしたから」

「弄るなっ」

「良いじゃないか、減る物じゃないし。それじゃあ良い結果を期待してるよ——」

「え……？」

えいつ、と彼を押し飛ばす自称神様。

「ふ、ふ、ふざけんなあああああつあああああああああああああ
あああああ!!!!!!」

体が舞い上がれば、そのまま空中を浮遊し、扉に吸い込まれれば消え去る和人。

ゆっくりと重低音を響かせながら閉じて行く扉を見詰め、彼女唯願う。

「君に掛かってるんだよ、あの世界の運命は――」

届かぬ願いは、唯、彼の為に――。

第三話 戦争と空想者

漆黒の闇。

闇は流れ、更に深い闇へと和人は落ちて行く。

「これ、本当にそのエルディアンテとか言う異世界に通じてるんだろうな……」

落下しつつ呟く。これで実は出たら地獄でした何て言う最悪の展開だけは止めて欲しい。

しかし、本当だったならしく、闇はまるで黒い紙を破るかの様に引き裂かれ、千切れ、光を受け入れて行く。

眩い程の光が彼を包み――。

「第三番遠距離部隊、装填、放てえええつつ！！！」

怒声に似た声が硝煙の香る荒野に轟き、声に応える様に奇妙な銃を構えていた青年や男性女性達が空中を舞う浮遊要塞に向けそれぞれの装填した物を放つ。

ノズルフラッシュが銃口で炸裂し、ズガガガッ！！　と言う連射音がその場を支配した。

ツキュウンツキュウンツキュン！！　とそれぞれの赤やら青やら黄色やらの、弾丸ではない閃光の様な物は浮遊要塞に迫り、直撃すると同時に弾け、墜落させて行く。

「大型要塞は放って置け！！　今は小型の戦闘機を狙え、良いな！　！　無駄弾は撃つな、当たらないと思ったら撃つんじゃない、分かったなああつ！！？」

『おおおおおおおおおおおおおおつつ！！！！！！』

にその漆黒の髪を靡かせながら、奇天烈な服装のズボンのポケットに手をつ込みながら、崩壊した民家の屋根の上に立つ青年の姿があった。

「あのさ」

青年が声を漏らす。

部隊長達は皆体を強張らせ、新手かと思い武器を構えようとするが、青年は慌てて此方にその藍色の瞳を横目に向けて、告げて来た。

「俺は敵じゃないから」

そして始まる。

青年による、破壊の宴が――。

あの青年は誰なのか。

それを知るには、約10分程時間を遡る必要がある。

約10分前の事。

「うわああ嗚呼嗚呼嗚呼ああああアあああああああ――！！！！」

良く叫ぶなと思うだろうが、これは致し方ないのだ。

何せ空中で穴は闇は消え去り、地上から数百メートル地点で吐き出されたのだから。

「クソ、クソ！！ クソツタレ！！　せめて地面で吐き出せよ！！
これじゃあ死ぬじゃん！！　また死んじゃうよ、畜生が！！」

急激な速度で落下しつつ、和人は叫ぶ。

しかし叫びは風にかき消され、その代わりに視界にある物が飛び込んで来た。

「あれは……、国、なのか……？」

もうもうと黒煙を上げる国家と思える場所。そしてその国家に攻め込んでいるのが、己より下の空を様々な戦闘機と思える兵器が舞い踊っている。

「成程……、あの国ね、その救援信号とやらを発して俺に助けを求めたのは……」

納得しつつ、はたと気付く。

「待てよ……、って事は、俺、何。来て早々戦争に巻き込まれるって訳！？」

若干語弊もあるだろうが、まあそうなるだろう。そもそも戦争なのかどうか分からない為に、どうすれば良いのかも今の彼には分からない。

現代の若者に戦争を求める方がそもそもどうかしているだろう。

「ととと、その前に取り敢えず着地だな、着地。このまま行ったら……、確実に民家に突っ込むな……、それは避けよう。近所迷惑甚だしい」

うんうんと1人頷きつつ、それじゃあどうする、と考える。

時間はないのだが、思考を巡らせる。

そしてある結論に至る。

「……能力、使って見ますかあ」

実は彼も彼で使ってみたくてたまらない思いと、使った後の副作用や周囲への損害、迷惑、被害を考えると恐怖の思いがあってどう

したら良いのか悩んでいたのだ。

「……ま、大丈夫だよな、あの神様も何も言っていなかったし……、
よし、それじゃあ空想が具現化するんだったら——何でも良いんだ
よな」

瞳を閉じる。

きつともう民家に突っ込むまで5分もないだろう。

だが、彼にとって空想等——、

「1分で十分だ——？舞遊？」

名前は完全適当だが、それでも十分効果を発揮した。

「おとと、つ、と、と……。難しいな……。こりゃ……」

周囲の風を足に纏わせる力、それが今回の空想した物。

本当は風を纏う靴やら、翼を空想し、具現化すれば良かったのだ
ろうが、しなかった。理由としては簡単で、翼を纏うと化け物扱い
されそうだし、風を纏う靴と言っても今やっている事と余り変わら
ないのでやる必要がないと踏んだのだ。

「さて、と……。試しだな、これも……。あの戦闘機っぽいのが敵
なら——」

黒煙の中に舞い降りながら、次の攻撃になりそうな物を空想する。

それは虚空より出る物^{いで}。

それは一撃必殺。

追尾無し。

「？黒い杭？」

自然と漏れた言葉。

脳内で決定した通り、黒い、直径40センチ位だろうか。それ位
の杭が虚空より数本具現化し、戦闘機に降り注いだのだ。

何が起こったのか分からぬまま、戦闘機は撃墜され、大爆発を巻

き起こす。

「ふう……、成程成程、分かって来た……」

頷いてから、屋根に舞い降り、其処で気付く。

周囲の視線に。

特に剣やら槍やら銃を持つてる鎧姿の方々の視線が鋭い為痛々しく、ついでに言うのなら既にその鎧を纏っている方々は臨戦態勢だ。

「ま、待つて待て。俺は敵じゃないってのに……」

和人は苦笑してから肩を竦め、空中に視線をやってから、投げ掛けた。

「あのさ」

同時、思考回路が高速化された気がした。

既に頭の中では、戦闘の準備済みだと言う事だろうか？

「俺は敵じゃないから」

ズ、ドンツ！！！！　と言う衝撃音を響かせ風を螺旋状に足元で爆発させ、舞い上がる。

まだ扱い慣れて居ない為、ふらふらするも、それでも此処まで扱えるのならやはりこれはその戦闘に直ぐに対応して行く、天性の戦闘センスの戯物たわものと言った所だろうか？

そして始まる、捕獲の宴が――。

破壊ではないと、断じて言いたい和人でもあった。

第四話 撤退命令

「『^{サファギオット}霍乱爆撃機』 第四部隊、『^{サファギオット}霍乱爆撃機』 第四部隊。報告せよ」

『此方『^{サファギオット}霍乱爆撃機』 第四部隊、異常なし異常——いや、待て、人

……？』

「どうした、第四部隊」

『人、なのか分からないが此方に接近中。迎撃体勢に入る』

「了解した——」

念話石の含まれた通信機の設置されたコクピットで、男は頷いてから、完全に翼を展開した。

「人だか魔だか分からぬが、迎撃させて貰う！」

何かをチャージする音が後方で響き、前に踏み込むと同時にその戒めは解け、二対の気筒から青色の炎を吐き出す。轟音が空を覆い、他の機体も人の姿を確認したのか、己の機体同様人に向かって空を駆けて行く。

——人ならば一撃、魔だとしても一撃で終わらせる。

魔弾の装填されているバルカン砲染みた銃火器のトリガーを引こうとしたその瞬間だった。

駆けて行った己以外の機体は突如不可思議な現象に包まれ、落下して行く。

それこそ撃墜ではなく、落下。

「何……、だと！？」

乗っていた操縦者達は脱出ポットにより脱出はしているも、この奇怪な現象に驚かずには居られない。

「く、……此方『^{サファギオット}霍乱爆撃機』 第四部隊、撤退せよ。全軍空上を支配する部隊に次ぐ、撤退せよ！」

『?! な、何故ですか!? 今此方が押しております、今しか時は——』

歯を食い縛りながら、男はその驚愕に言葉を染める皆の言葉を耳

にする。

「正体不明の物により、我第四部隊は私を残して全機落下。操縦士達の生存は確認、故に撤退命令だ。捕虜になるつもりならば好きにせよ、だが、あの見得ざる力、あれだけは注意せよ。以上、後は己の意識次第だ」

男の乗った機体は身を翻し、国とは違う彼方の空に向け、進路を取り、そのまま駆け去って行く。他の機体も数秒程沈黙してから、同じ様に彼方の空に機体向け、駆け去って行く。

空を舞っていた『サファギオット霍乱爆撃機』は皆、不可思議な力と物の影響により、急遽にも急遽な撤退を開始する。

そして代わりに空を舞っているのは、1人の青年。

青年は呟く。

「空想通り……、さて、俺の仕事は終わり。地上部隊も引き揚げてみたいだし……、休めるかな？」

あの爆撃機を落下させたのは、無論和人だが、それを知るのは約5分前に時間を魔器戻す必要があるようだ。

約5分前。

空に舞い上がった和人は、複数の機体を見据え、呟いた。

「これはこれで壮観なんだけどなあ……、航空ショーを間近で見てるみたいで」

苦笑混じりに呟く彼に応える様に、それぞれの機体は風を切り裂きながら、それこそ炎を撒き散らして彼に迫る。

「成程、時間を遅らせて……、良い作戦だけど、……、通じないよ」
迫る爆撃機はそれぞれの武器でもある、バルカン染みた銃火器や、ミサイルポッド染みた重火器を此方に構える。

しかし、

「殺すのは後味悪いから、と……」

再び脳内で構築されて行く、それにより、戦況は大きく引つ繰り返る事となる。

爆撃機の原動力の無効化。

攻撃無効化。

あれの原動力がRPG宜しくの魔力なら――。

「？魔力無効化領域・展開？！――」
クリスタル・ジャマー

？水晶？から魔力を供給し、魔法を使うと言う手段を用いる場合に使われる？魔力無効化装置？を知っているだろうか？
クリスタル・ジャマー

今回和人が空想し、創作したのはその？魔力無効化装置？の？領域？バージョン。

展開出来る領域は小規模かもしれないが、それでも効果はてきめん靦面。

領域に踏み込んだ者に裁きを――爆撃機達は？魔力？と言う動力源を失い、そのまま地上へと重力に従い落下して行く。

「な、う、うわああああああ！！！」

「ツツ、各員脱出せよ！！！」

「ま、嘘だろ！？ ツ、ち、い！！！」

毒舌を吐きながら、悲鳴を上げながら、命令を下しながら。
操縦士達はハッチを開け、風の魔石を手に脱出し始める。

風の魔石は外気の風に触れると展開し、所持者達の体を浮遊させる。風の魔石ならではの浮遊効果を脱出に当てたのだ。

「ふう……」

そして和人は撤退して行く爆撃機達と地上の部隊を見据えながら、
呟く。

「空想通り……、さて、俺の仕事は終わり。地上部隊も引き揚げて
るみたいだし……、休めるかな？」

魔力無効化領域を解除すれば、足に纏っている風を弱体化させ、
徐々に高度を下げて行く。

「それにしても、この世界。案外技術も発展してるんだな……」

落下しては森の中で大爆発を巻き起こす爆撃機達を見詰めながら
和人は呟いた。

「これならあの爆撃機回収して置くべきだったな……」

次々と爆破する爆撃機達に勿体無い精神の彼は嘆息しては、ま、
次の機会には回収しよう、と頷く。

「後は、どうあの人達に説明するかだよな……」

高度を下げながら己を見詰める鎧姿の方々に肩を竦める。

「召喚されましたって言って信じて貰えれば良いけど」

第五話 騎士と王と彼の答え

「まずは助けてくれた事を感謝しよう……、助かった——だが、貴様、何者だ？ 答えよ、返答次第ではこの場で殺す」

静寂の中に冷たい声。

結局あの後、屋根に舞い降りた和人は鎧姿の方々の場所に降り立ち、説明しようとした——のだが、駄目だった。説明しようとした瞬間、奇妙な銃を持った方々に囲まれてしまい、現在、膠着状態。
「説明する説明しますからお願いですから銃を下ろして下さい。これじゃあ説明しようにも無理です」

男は和人の言葉に耳を傾けた後、暫し黙り、直ぐに「良かろう」と頷いてから銃を構える鎧姿の方々を手で制し、その奇妙な銃を下ろさせる。

「ん、それでは……、えと、どう言えば良いのか分かりませんが、一応召喚された如月和人です、はい……」

しどろもどろになりながら告げる和人に男を含めた彼等は驚愕に顔色を染めてから、ざわめき、どよめき、惑っていた。

「それは真か……？」

その喧騒と言う名のざわめきとどよめき、惑いを黙らせて、男は顔を挙げてから和人を見据えた。

「は、はい。一応、この国が救援信号を挙げていたみたいなので、助けに馳せ参じました……」

頷けば、男はその黒き甲冑に手を掛けて外し、その顔を露わにする。

「済まなかった。我等としても見知らぬ人物だった物で……、私は？ アルケスⅡヤウⅡエルケディウム？。この騎士団の団三番から第四番の部隊の部隊長を務める者だ」

特徴的なのは何と言ってもその藍色の髪と瞳だろう。サファイアより濃紺の、それこそ闇の様に深い藍色の瞳。髪は風に靡けば藍色

ながら光に照り、瞳とは逆にサファイアの如き輝きを見せる。その甲冑を纏う肉体もさながら、筋骨隆々としたボディービルダー顔負けの肉体かと思えば案外華奢で、その華奢で細身な肉体の中にどれだけの筋肉量が詰め込まれているのかと甚だ疑問な和人だった。

「ん、じゃあ俺も改めて……、如月和人、日本より召喚された一端の普通で健全な男子高校生です。宜しくお願いします」

互いに自己紹介し合えば、手を差し出す和人にアスセスは一瞬キョトンとし、直ぐに微笑ってからその手を取り握り「此方こそ、宜しく頼む」と頷いた。

「ではカズヒト殿、これより我が城に来て貰いたいのだが、どうだろうか？」

「城……？」

「嗚呼、此処から数分で着く。王政国家マスケルディアのマスケルディア城、其処で我等が王と王妃、そして姫様に逢って貰いたい。

勿論、部屋も与えられるだろうが……、どうだろうか？」

「乗った。行こうか」

「き、来てくれるのか？」

「嗚呼、俺も暇だからね。この世界に来てこの国を救って終わりで事じゃなさそうだし」

なあ？ と天を見上げてから、苦笑する。一種のあの自称神様への皮肉だ。

まあ和人は王やら王妃やら姫やらに逢いたいわけではなく、城と言うのが見てみたいと言っ好奇心と探究心、そしてその何よりも部屋と言っ言葉に惹かれたただけなのだが。

「今のは誰に言ったのだ？」

「ん、嗚呼、ちょっと」

「そうか、では行こう。歩けるか？」

「歩けないハズがない。行こう」

「うむ。では皆の者、帰還するぞ……！」

『おおおおおおおおおおお……！！』

腹の底まで響く様な声に和人は驚いてから微笑み、こう言うのも良いなあ、と思いつつ歩み出したアルケスの跡を着いて行くのだった。

「これは……、絶景かな絶景かな……」

歩いて約10分位だろうか？

和人の目の前には、ドイツのノイスヴァンシュタイン城に負けずとも劣らない立派な白亜の城が聳え立っていた。

「これが我が国の城、マスケルディア城。我が国の王と王妃、姫様は王の間に居る。まずは謁見だ。行くぞ、カズヒト殿」

「あ、了解」

一度城門前で立ち止まったアルケスの跡を追い歩みながら、周囲を見回す。

（ホント凄いな……、金とか使われてるじゃねえか……。ホントRPG宜しくの城過ぎるぜ……。考えて見れば勇者はこう言う城を毎日見てるんだよな……。良いなあ）

嘆息して、ま、勇者も世界を魔王の手から救うって言う大変な仕事をしてるんだし、妥当か、と思ってから、やれやれ、と肩を竦めた。

敷き詰められた赤絨毯の長い廊下を抜け、此处に使える給仕服に身を包んだ女性達に頭を下げながら、和人はアルケスの跡を着いて行く。

「此处だ」

「此处？　つて、おお……」

立ち止まったアルケスの隣で彼の見た物は巨大な扉。押し開きの扉だが、これは二人で開くものなのだろうか？

「では、行くぞ？」

「あ、嗚呼、了解」

若干緊張しつつ、扉を押し始めるアルケスに加わり、己も扉に手を付き、押せば、ギギギツと言う床と擦れる音が耳に届き、扉が開いていく感覚が伝わって来た。

「マスケルディア王、マスケルディア王妃。アルケスⅡヤウⅡエルケデムで御座います。この度、逢わせたい人物が居るのでこの場に馳せ参じました」

無駄に広いその部屋は、何処か緊張感漂う場。

静寂と沈黙の広がる中、厳かに王は口を開けた。

「そうか——良かるう、下がれ」

「ハッ」

膝を付いたアルケスは腰を上げると、和人の肩に手を乗せ「外で待つ」と囁いてから、その場を後にする。

「ちょ……「汝がアルケスの言う逢わせたい者か？」あ、……はい、多分、そうです」

「名は何と言う？」

「き、如月、和人です」

「珍しい名だな……、何処の者だ？」

「えと……、この世界に召喚された、元々地球って言う世界の日本って言う場所の一端の普通で健全な男子高校生です……、はい」

正直、此処まで説明する必要はなかったのではないかと思っただ、これで相手が納得行ってくればそれもそれで万々歳だ。

と、ガタツと立ち上がった王と王妃は「それは真か？」と尋ねて来る。

「は、はい……、真です」

数秒の間。

そして、王と王妃は再びその金色の装飾の成された絢爛豪華な椅子に深くまで腰掛け「そうか……、そうか」と何度も頷いた。

「ではカズヒトよ、一つ問おう」

「は、はい」

「汝は、この国を救ってくれるのか？」

静かに目を見開く和人のその藍色の瞳を見詰める王。

視線が交錯し、静寂と沈黙がその場を支配する。

その時は長く感じた。

その時は直ぐに来た。

——どうするんだ？ はいって答えるのか？

誰かが問うて来る。

（答えたいのは山々だけど、そう簡単には答えられないだろうよ……）

肩を竦める和人に、彼は和人に背を向けた状態で空を仰ぐ。

——この国を救う為に召喚されたのに、悩む必要が何処にある？

（それは……）

——テメエはテメエの好きな様にすりゃ良いのさ。ほら、王様も

王妃様もテメエの答えを待ちしてるぜ？

声は己の声に似ている気がした。

声は己の背を昔推してくれた声に似ていた。

声は——和人は瞳を細めてから、静かに頷き、王のその真鍮色しんどういろの瞳を見据えたまま答えた。

「はい、俺はその為にこの国に、この世界に来ました」

そして始まる。

1人の空想者の長い長い、物語が。

その後、扉の向こうで上がる歓声と、王と王妃が静かに頷くのは、ほぼ同時だった。

第六話 溢れる思いは決意へと

窓の外でそれは美しい蒼月が輝く深夜。

与えられた部屋に備え付けられた一目で高級品と分かる天蓋付きベッドに和人は直行、1日の疲労を吐き出す様にして深い深い溜め息を吐きながら轟沈した。

ダウンが素材なのか、羽毛が素材なのか分からないが、轟沈する彼を受け止めた素材は、まるで愛しき女性に抱き締められたかのような感覚。

心地良い感覚に陥りながら、和人は布団に顔を埋めたまま深い溜め息をもう一度。そして寝返りを打つ様にして己が肉体を天蓋に向ければ、天蓋を見詰め、再び深い溜め息を吐く。

たった数秒の間に合計三度の溜め息。これで幸せは逃げたに違いない。

やれやれ、と肩を竦めてから、和人の思考は今日あった事に向けられる。

来て早々巻き込まれた戦闘——結局あれは聞いた話によれば本当に戦争だったらしく、対戦国家は帝政国家アルトレスタ、通称『帝国』と呼ばれる全土に覇を唱える軍事大国で、どうにも此処王政国家マスケルディアを支配し、領土にしようとしていたらしい。

此処で聞いた情報だけなのだが、この大陸を構成する国家について説明しようと思う。

此处、東方大陸には合計7つの国家が存在し、それぞれの国家で特色や特徴、政治状況や経済状況は違うながらも、『覇王の血統を引く者』が存在する国家と言う事には間違いはない。

そもそも『覇王』と言うのは、このエルディアンテと呼ばれる異世界を全統一し、『エスシア連邦』と呼ばれる『アルトレスタ』『バイツ』『コーディアンツ』の三大陸主要国家都市を成り立たせた

人物で、それぞれのこの7つの国家に『霸王の遺産』を遺した、伝承に登場する偉大な人物でもある。

例に挙げるのならば、此处——王政国家マスケルディアの『霸王の遺産』は『朱覇の指輪』と呼ばれる伝説級の神具。他の国家にも似た様に神具は存在し、それぞれの神具に『朱』の様な色が刻まれている。

この神具を守護し、国家に助言し、守護する役目を全うするのが人間を超越し、『水晶』^{クリスタル}の膨大な魔力を体内に宿した人間を超越した神以下の存在『司界者』^{ルシア}である。

司界者はその圧倒的な力と魔力、存在感から通常の戦闘や乱戦、紛争、内戦、戦争程度では介入してはならないと言う法律『司界者介入禁止令』^{ルシア・アレイブネス}が定められた。

『司界者介入禁止令』を破った国家には神の鉄槌とも呼ばれる一撃が待っているらしく、直撃した国家は人1人残さず消滅すると言う話だ。

怖いもんだ、と和人は頷いてから、天蓋を見詰め続けた。

では、此处王政国家マスケルディアの司界者は誰なのか、そして司界者はどんな時に介入出来るのか、と言う疑問が膨れ上がる。

まず最初の疑問だが、此处王政国家マスケルディアの司界者は、名前は知られておらず、唯分かるのは『灼熱劫火』^{スザク}と呼ばれる火炎系統最強の魔法を自由自在に底無しの魔力で扱う事の出来る男だと言う事しかない。

次に司界者の介入についてだが、司界者は年に一度開かれる『第六血盟』と呼ばれる会議に出席し、其処で介入制度の緩和か、それとも厳重化かを定める。

定められた結果によつては今まで以上に介入制度が厳しくなったり、はたまた或いは介入制度が緩和され、自由自在に戦争に介入出来るたりもする。

現在の制度では大戦争級の戦争の場合のみ介入が赦されているのだが、それでも介入出来る回数は相当限られて来る。

年に一度、いや、数十年に一度、数百年に一度起こるか分からぬ大戦争相手に、司界者^{ルシア}は唯待つ事しか出来ないとなると、それも聊^{いささ}か厳し過ぎるだろうと言う意見も出ているのだ、どう転ぶ事やら。

和人はそつと手を伸ばし、天蓋を握ろうとする。

届かない。やはり、届かない。

掴めない。まだ、掴めない。

何時か掴んでみせると誓ったあの日——少年は。

やや感傷に浸っていると、扉が二度ノックされた。

「はい、どうぞ?」

上半身を起こして答えると、其処には見ず知らずの幼女が立っていた。

靡く金色の長い髪は、きつと肩甲骨辺りまで伸びている。前髪の隙間で揺れるのは、深い碧緑^{くきじよく}としたエメラルドの如き輝きを思わせる大きな双眸。

端整の整った顔は、確実に美少女にカテゴライズされるであろう顔で、体系も並々。中学三年生程度の身長で、体系と言った所だろう。

「うむ、邪魔するぞ」

若干上から目線なのが気に食わないが、和人は「えと、どちら様でしょう?」と首を傾げる。

「うむ、妾はアルテミシア^{テミシア}デ^デマスケルディアじゃ。宜しく頼む」

「はあ……って、マスケルディア^{マスケルディア}って事は——あのつかぬ事をお伺いしますが、貴方のご身分は……?」

恐る恐る聞いてみると、アルテミシアと名乗る少女は「此処、王政国家マスケルディアを司る父様^{とうさま}と母様の娘じゃ。身分的に言えば、姫に当たるかの」と平然に答えては頷いた。

「やつぱり……、それじゃ俺も、一応自己紹介を」

「畏まらんでも良い。堅苦しいのは妾は嫌いで」

扉を静かに閉めた彼女は此方に歩み寄って来てから己の隣に腰掛

けては無邪気に笑う。

「は、はあ、なら……、えと、一応英雄として召喚された、如月和人です、宜しく」

畏まらなくて良いと言われても中々——頼を？いてから呟く和人にアルテミシアは「カズヒトか、うむ、宜しく頼む」と微笑み、彼の手を取ってはぎゅうっと握って来る。

握手されれば「此方こそ」と微笑み返し、和人はその小さな手を軽く握り返した。

「で、物は相談なのじゃがな、カズヒトよ」

「はいはい、何でしょう？」

握手したまま首を傾げれば、アルテミシアは「うむ、此処王政国家マスケルディアから東に2キロ、北に1キロの地点にの魔物が大量繁殖しているらしいのじゃ」と呟いた。

「魔物……、ふむ、それで？」

「うむ、それでの、東に2キロ、北に1キロと言えば商品を運ぶ物資輸送車達の必ず通る道故、魔物が居ては通れなかるう？　だからカズヒト、此処はその英雄の力を使つて、それを退治して来て欲しいのじゃ」

「退治……ね、成程成程。其処の魔物な、了解了解」

「うむ、それにしても一気に口調が軽くなったの」

我知らず内に平然と答えていた和人は改めて己の口調にしまったと言つ表情をしてから「申し訳在りません」と頭を下げる。

するとアルテミシアは頭を下げる和人にクスクス笑つてから、肩を竦めて見せた。

「いや構わん。その方が妾も楽じゃ。敬語上から目線よりマシじゃよ」

笑つアルテミシアに和人は「分からないでもない」と苦笑した。

「あ、そう言えばさ、聞きたい事があつたんだ」

思い出した様に呟く和人にアルテミシアは「何じゃ？」と首を傾げる。

「この部屋って、俺が借りちゃって良いの？」

借りっ放しと言うわけにも行かないだろう。これが普通の旅館と言うのならまだしも、城の部屋である。そうなると話別、使う人間が己以外に居るのなら迷惑はかけられないだろう。

（流石にくだらないだろうしな……、生活するに最低限の資金は稼げば良いし、そうしたら宿屋の一室でも借りて住み込めば良いか……）

しかし、返答は和人の考えていた物とは違っていた。

「いや、構わんぞ？　むしろくれてやろう、この様な部屋なら他にも幾つもある」

「……マジで？」

「まぢ……？」

結論、この世界でマジは通じないらしい。

慌てて顔の前で手を横に振れば誤魔化す様に笑ってから尋ね直した。

「嗚呼、いや、ホントに？」

「うむ、本当じゃ。妾は嘘は吐かん」

数秒の沈黙。

瞬間、和人は弾けた様に腕を天に掲げ「よっしゃ！」と叫んだ。

その様子にクスクスと笑みを漏らすアルテミシア。

「ん、それじゃあ有り難く貰って置くよ、アルテミシア姫」

「構わん構わん。それより、アルテミシアでは長かるう？」

「嗚呼、まあ……、長いな、うん」

素直に頷けば、アルテミシアは「これからはアルシアで構わん」

と頷いてから「特別じゃぞ？」と小さく首を傾げて来る。

「え、でも……、ホントに良いのか？」

「構わぬ。それは妾の愛称故、汝にアルテミシアなどと言う長い名前で呼ばれるのは何となく嫌だったんじゃ」

ふう、と多少膨れっ面になりながら顔を背けるアルテミシアに和人は、子供だな、ホントと苦笑してから「ん、それじゃあ遠慮なく呼ばせて貰うよ」とその金色の髪を梳く様に撫でた。

サラサラツと指先に絡まる事なく滑り落ちていく絹の如きその髪は、手に感触を残しては消えて行く。

「ほう……、カズヒトは撫でるのが上手いのう」

瞳を細め、猫の様に表情を柔らかにするアルシアに和人は癒された様に微笑み返してから「そう？」と首を傾げて「それじゃあやってやる」と頷いて、再びその髪を梳く様にして撫でた。

撫でながら、和人は思う。

（初めてだな……、こんなにこの子の笑顔をもっと見ていたいと思ったのは……。こんなに、護りたいと思ったのは……。これが保護欲なのかねえ……。やれやれ、結局俺も欲望に飲み込まれた人間の1人かよ）

我ながら達観した様な台詞を心の中で呟いてから、それでも彼女を見詰め――。

（彼女を護りたい……。彼女の笑顔が見たい、もっと、もっと――
嗚呼、この国を、救ってみせるさ、絶対にな……）

硬い思いは、決意へと変わり――。

第七話 奈落の青年と王国の少年

思い出すのは——己の勇者時代。

嗚呼、あの頃は楽しかったな、と。

思い出すのは——人々の悲鳴と絶叫。

嗚呼、あの頃は酷かったな、と。

思い出すのは——彼女の事。

嗚呼、嗚呼、彼女は——。

青年は唯、光無き奈落の底で想う。

伸び切った紫色の髪を垂らしながら——、
虚ろな灰色の双眸で——、

己が殺した彼女の事を——。

翌朝は快晴だった。

その朝の光の中、和人は何時もの癖で目覚まし時計を探していた。

（……、あ、そうか、……もう、時間通りに起きなくて、良いんだ
よな）

まどろみの中で、己の置かれている現状を、今の現実として再認識すれば、目覚まし時計を探していた腕を止め、そのままするすると引っ込めれば、布団の中に納める。

（……もう一回寝よう……、そうしよう、……）
思考は徐々に停止し、意識も薄くなっ行って行けば——、

トットット、と言う音が聞こえた。

一体何の音だろうか？

何かが近付いて来る音に違いはないだろうか、一体だとしたら誰だろうか？

起こしに来てくれたメイドだろうか？

それともアルケスだろうか——いや、それは想像したくない、吐き気を催す。

意識が覚醒し始めれば——、

「おーきーろっ」

ドボオッ！！

「——ツツツ！？！？%\$#??？」

それはきつと、声に成らぬ一撃だったのであろう。

腹部、それこそ鳩尾部分みぞおちに直撃した硬い何か、それは喋った——
待て。

（しゃ、……、べ、た……？）

可笑しい、喋った？

（しかも……、あの……、…声……、ま、さか……）

悶絶しながら、その聞き覚えのある声を記憶から呼び覚ませば、ハッとして顔を顰めながら体を起こした。

僅かに腹部に痛みが走るも、何のその。

「きゃっ」

「っと……」

更にはこの可愛らしい声、やはりそうだ。

背中から倒れそうになる彼女の背中を腕を回して支えた和人は、溜め息を吐いてから「何やってるんだし、アリシア」と苦笑しながら尋ねた。

名前を呼ばれた彼女は彼の腕の中で「むう」としつつ「ほれ、今日は魔物退治じゃろ？ 妾も着いて行くのでな、それで起こしに来たのじゃ。どうじゃ偉いじゃろ？」と自信満々にそのない胸を張れば、無邪気に笑った。

「嗚呼、偉いな。本当は褒めてやりたいんだけど……、うん、次からは体に飛び乗るのは止めてくれ、頼むから」

何処かやるせなさを感じながら和人は腹部の痛みに苦笑して、彼女の頭を優しく撫でてから懇願した。流石に毎日フライングボディプレスで起こされたら溜まらない。

「む、分かったのじゃ。次からは揺すって起こす」

コクリと頷くアリシア。

こう言った彼女の寛大な心に和人は正直感謝している。もし彼女が唯のお転婆じゃじゃ馬の我儘姫だったらきつと和人も毎日が疲労の連続でいつか臨界点に達しキレる事だろう。対処し切れずこの国を出て行くかもしれない。しかも、彼女は確かにお転婆でじゃじゃ馬で、我儘姫かもしれないが、それでも人の話はちゃんと聞き、納得しては自分の考えも述べる彼女のその友好関係を築く上で大切なコミュニケーション能力と、己の願いや望みは叶えられるだけ叶えようとする、そんな寛大な心。そして先程の様にきちんと理由が述べられれば納得もしてくれる許容量の広さに正直、いや、本気で人は感謝している。感謝してもし切れないだろう。

——ホント、アリシアが御姫様で良かった……。

うんうん、と1人頷く和人にアリシアは首を捻り「どうしたのじや?」と尋ねて来る。

「いや、何でもないさ、唯、アリシアは良い子だなあ、って思っただけ」

苦笑しては、彼女の髪を梳く様に撫でて、撫でられながらアリシアは僅かに頬を朱色に染めれば、俯いて「そ、そうか……? なら、良いのじゃ」と呟いてから、瞳を細めていた。

「さて、それじゃあ着替えて魔物退治に行きましょうかね」

彼女の頭から手を離せば「ほら、アリシア。ちよっと退いてくれるか?」と問う。

アリシアはコクと頷いてから「分かった」と呟き、和人の腕から逃れ、四つん這いになりはいはいの状態で彼から離れれば「これで良いかの?」と首を小さく傾げる。

「嗚呼、サンキュ。それじゃあ今日の服装はつと……」

ベッドから降りれば顎に手を添えて呟く。

昨日の服装じゃ不潔だから、いや、不潔以前に使い物にならないだろうから、せめて戦闘に適す服が良いな、と思い、空想する。

それは鎧の如き服装。

動き易さ重視、コート有り。

色は黒一色――。

刹那、彼が光に包まれると、アリシアは驚愕に目を剥き、幻覚を見ているのかと目を擦っている内に着替え終えていた和人に啞然としていた。

「空想通り、と」

着替えた和人は和人で上機嫌に姿鏡で己の服装を写しては頷いていた。

上から黒いシャツ、黒い薄手にスラックスの様なパンツ。ベルトを腰下で嵌めれば、きちんと締める。シャツの上には厚手でなければ薄手でもなく、一般的に売られているコートに見得れば高級品のコートに見得なくもない、膝までの長い丈のロングコートを羽織っ

ていた。首元には白き獣の毛でファーが付けられ、肩口には十字架のマークが刻まれている。

十字架のマークはきつと、彼なりのアレンジなのだろう。

「上等上等」

十字架にも笑みを浮かべて呟いて、うんうんと頷けば、振り返ると、其処には瞳を爛々と輝かせているアリシアが居た。

「えと……、一体何で御座いましょう？」

己をその純粹無垢な瞳で見詰めて来るアリシアに尋ねてみれば「今の一体何なのじゃ！？ 説明せい、カズヒトツ」とコートを掴んではキラキラと輝かせながら瞳を大きく見開いている。

「あー……、どう説明したら良いんだろ……」

ファンタジネット・クリエイター

えと、まあ今のは俺の能力の1つで『インフォルティオ・サーバー空想具現者』って言う奴。空想した物全てを具現化する事が出来る能力さ」

極めて簡潔に説明してやると、アリシアはふんふんと興味深そうに頷いている。

「まあ俺には2つ能力があつて、もう1つは『インフォルティオ・サーバー情報会得者』。自動

発動みたいで、見た物聞いた物の情報を全て得る事が出来るし、触れた物、者の過去から全てを知る事が可能って言う反則寸前な能力」

これだけだよ、と頷けば、アリシアは「ほー、流石英雄じゃな」

と感心する様に頷いてから「カズヒトが居れば戦争は負けぬの」と無邪気に笑う。

「嗚呼、負けないさ……、多分な」

多分、と言う言葉は聞こえない。

囁く程度の声量なのだから。

勝ち切れる確信が無いわけではない、此処まで反則級能力を持っているのだから、負けるハズはないと信じたい。

が、それでも何時か負ける日は来る。主人公も最強も主役も負けてから鍛えて成長する。それが王道なのだ。だから何時か己も負ける時が来る、だから多分なのだ。

「そうかそうかつ、よし、それじゃあ手始めに魔物退治に行くぞっ

！
」

「ちよ、待てつてば引つ張るなよっ」

満面な笑みを浮かべたままカズヒトの手を握り引つ張り始める彼女に和人は苦笑しつつ着いて行つた。

これが平和。

これが今の日常。

これが――現実。

和人は赤絨毯の敷かれた廊下を歩みながら、唯、思つ。

負けて死んだら、俺、どうなるんだろう、と。

第八話 魔物退治開始

カデサ大森林は、大森林と言うのは名ばかりで実は短いのではないか、と言う意見が多数述べられている悲しき森である。

気候は一年を通して暖かく、その暖かさから木々が異常な程密生し、それ故に陽光が日中でも森に差す事はない。

カデサ大森林自体は確かに短い、それは仮の姿。実質、カデサ大森林は深く、唯単に物資輸送者達専用の安全安心克最速のルート、それこそ人工的に舗装された道を通しているから短く感じられるだけであって、実際は案内人及び、この森に生息する『情報白兔』インフォートラビッツと呼ばれる森全ての事を知る魔物の力を借りなければ森は通り抜けられないとされている。

対して、物資輸送者達はその長年の勘と、『運牛』バグーの鼻の良さから悠々とこの森を通過する。幾ら迷おうとも運牛が居れば必ず出られると言われている。

——が、この度、そのカデサ大森林の物資輸送者達が必ず通過する舗装された道に魔物が出現する様になってしまったのだと言う。

この時期、魔物は冬眠に備えて食糧を漁りに来る。それこそ集落を襲う魔物も存在するし、仲間を襲う魔物も存在する。

カデサ大森林に出現した魔物もきつと食糧を漁りに来たのだろう——とは、アルケスの話。

現在和人は纏っている黒いコートを風に靡^{なび}かせながら、アリシアと共に魔物討伐隊の馬車に乗り込み、目的地まで向かっていた。

（馬車って初めて乗るけど、腰痛え……）

揺れる揺れる、時折跳ねれば腰を打ち付ける。

（ぎっくり腰になるのは避けたいぞ……）

やれやれ、と溜め息吐いて正面を見据えれば、見得て来たのは森の入り口。

「あれが、カデサ大森林、なのか？」

首を傾げると隣に腰掛けていたアリシアが頷きながら「そうじゃ」と呟いて「依頼内容は輸送の邪魔をする魔物の一掃じゃな」と和人を見上げた。

「一掃、ねえ……、ま、了解。……でもそれにしちゃあ人多過ぎないか？」

首を傾げ、振り返る和人に乗っていたまだ若き騎士達は身を竦める。

アルケスは己の私事故に行けないと言うので、編成された魔物討伐隊。乗り込んでいるのは確かに騎士なのだが、まだ見習いらしく、緊張に震える者や己の掌に何かの文字を刻んで飲み込む者、自分は大丈夫勝てる勝てる与自己暗示する者と、様々な方法で己のモチベーションと整えている。

「……ホントに大丈夫かよ、これ」

「……済まぬ、妾も心配になって来た」

二人揃って溜め息を吐けば、再び揺れる馬車。

揺れ揺れに揺れ、馬車は広大な大地を駆け抜ける。

唯、カデサ大森林を目指して……。

「これは……、凄いな」

近くで見るとまだ壮観だった。

生え揃う樹木は、彼等を招き入れる様にその伸びた枝を怪しげに揺らしている。

ざわざわと、葉同士が擦れ、そわそわと風が吹き抜ける。

「富士の樹海にも負けずとも劣らない、ってか……」。

確かにこりゃあ案内人やらが居ないと迷いそうだ」

我知らず内に眩き1人納得する和人に、アリシアは首を傾げ「何を言っているのじゃ?」と尋ねた。

「ん、いやちよつとね。確かに案内人やらが居ないと迷いそうだなあつてさ」

「んむ」アリシアは確かにと頷いてから「で、どうじゃ。魔物の気配はするかの?」と首を捻ってその碧眼で和人を見詰めた。

顎に手を添えて「んー……」と数秒程森を見詰めてから和人は「いや、今の所はしないかな」と頷いて見詰め返した。

「そうか……、姿や気配を隠せる魔物も居るからの。では、参ろうか」

「嗚呼、だな……」

未知なる場所への第一歩。

馬車はその人工的に切り開かれた道へと踏み込み、進み始める。

無論、騎士達は馬車から居り、和人もまた周囲を警戒しながら息を潜めている。

と、刹那――、

「ギシャアアアアアアアアッツツ!!!!」

奇怪な咆哮が頭上より耳を劈き――、

「上か……ッ!!」

「う、そ!? ツツ!!」

「皆、陣形崩しちゃ駄目だよ!!」

騎士達が声を上げ、

「あれが、魔物か……」

舞い降り現れる魔物達を見て感嘆し、情報を得始める和人。

「数は5、種類は……、獣種、そりゃそうか……。弱点属性は炎、群れで行動するのか――で、事は群れを必ず纏めている親玉が居るよな……」

得た情報、それを元に和人は改めて身構える。

「カズヒト、武器はどうするのじゃ？」

「これから造る、けども……、まずはあの子達をどうにかしないと」
「……じゃな」

視線の先、猿型の魔物に必死に対応している騎士達。

1人は剣を、

1人は遠距離から弓を、

1人は治癒を、魔法を扱って分担して戦ってはいる物の、戦闘は初めてなのか、皆緊張し切っている為に、攻撃が当たっていない。

あれではご自由に攻撃して下さいと言っている様な物だ。

「アリシア、アリシアは何が使える？」

「妾は氷と闇じゃ……、無論、治癒系統は使えぬぞ」

「了解……—それじゃあ、アリシア、あの子達、頼んだ」

「任されたのじゃ。それでも姫ながら魔法は得意での、あのような雑魚共の相手なら素手でも十分じゃ」

「ホント何者だよ……、ま、任せたよ」

「任されたのじゃ」頷いたアリシアは和人とは反対方向に駆け出し、騎士達の目の前に現れれば、天に両手を掲げ告げる。

「妾はアルテムシア・デ・マスケルディア——汝等、命はないと知れ」

同時、騎士達に飛び掛った猿型の魔物達はその彼女の纏った白銀の魔力に身を退く。しかし、此处で撤退すれば冬眠する栄養は得られない——死を覚悟して——飛び掛った。

エンケンザス
「？氷槍？」

——が、直後、飛び掛った猿型の魔物が目撃した物は氷の槍。それも数は3本。当たれば致命傷、なら避ければ良い——その思考が浅はかだったと今更後悔する。

飛び掛ったと同時に放たれる、空中での体勢変更は不可ではないが、唯の戦闘に特化した猿型の魔物の脳にそれを考えられるハズもなく——、

「済まぬな、容赦出来ぬ故」

槍は猿型の魔物を深々と貫き、その意識を彼岸に飛ばす。

「アルテミシア姫様、お怪我は?!」

「大丈夫じゃ、それより其方は?」

「私達も何とか——ですが、何故アルテミシア姫様自ら此処に?」

甲冑の兜の中からくぐもった声を上げる少女。

アリシアは苦笑してから「いやなに」と続け「カズヒトの力を間近で見なかったのじゃよ」と視線を黒きコートを纏う青年に向けた。他の騎士達もまた、青年へと視線をやる。

其処には『英雄』として召喚された青年の、戦う姿があった。

「凄いな……、あれが魔法か」

氷槍を放つアリシアに驚愕しつつ、それでいて達観した様に呟けば、やれやれと肩を竦める。

「で、俺の相手はお前達かい?」

目の前に居るのは猿型の魔物と同じに見えるが、毛色の違う亜種とも言える猿型の魔物。

「それじゃあ——始めようか」

緩く肩幅に両足を開けば、右手を前に突き出し、紡ぐ。

「我が手中に姿を顕わせ——? 妖刀村正?」

眩い光の粒子は彼の右手の手中に凝縮され、紡がれた言葉通りにその姿を形成して行く。

現れたのは、妖気とも言える威圧感を放つ一振りの打刀。柄から伝わる冷たい感触は、これまで持った竹刀や模造刀とは異なっていた。心を昂ぶらせる癖に、同時に芯から凍える様な畏怖を抱かせる

奇妙な感覚。

しげしげと村正を見詰めてから和人は口元を綻ばせ――、

「さあ――来い」

駆け出した。

それと同時に猿型亜種は彼に飛び掛る。

後に咲いたのは、どちらの彼岸華か――。

それを知るのは、その場に居た彼女達だけである。

第九話 「忘れるなよ」

刃が躍る。

風を薙ぐ。

煌く一閃。

「次……」

相手が人で無い限り、極めて無情に、極めて冷酷に、極めて一撃で、極めて心を殺して殺す。

感情に流され、感情に踊らされ、感情に誘われ、感情に刃が鈍つては倒せる相手も、倒さなくては成らない相手も、倒さなければならぬ相手も倒せない。

何にも勝てない。

だからこそ、和人は今、無情に手に持つ己が武器を振るう。

次々と飛び掛る猿型亜種は迫る刃を回避しつつその手腕を振るうも、全て次に舞い込む刃に迎撃され、そのまま斬り臥せられてしまふ。

まだ彼は一撃もダメージを負っていない。

舞い散り、咲き乱れるは鮮血に華。

咲き乱れる華の中を駆け抜け、唯和人は猛然と刃を振るい続ける。その姿を見詰めるアリシアは唯、思う。

（あれでは……、唯の鬼神ではないか……）

普段とは違う、その冷酷な瞳。

深い冷たい闇を思わせる彼の瞳は、今、更に深く、淀んでいた。

その瞳で彼は何を思う？

その体で彼は何をやっている？

（カズヒトは……、まさかとは思うが——）

そこで1つの予想が彼女の脳裏に浮かんた。

数秒口を噤み、その予想に思いを寄せていると、猿型亜種の絶叫が彼女の耳を劈いた。

再び巻き上がる断末魔の悲鳴と、吹き上がり撒き散る鮮血にまだ若き騎士達は口元を抑える。

戦場に幾度と無く出撃し、幾多の死体や鮮血を見て来たアリシアでも、この光景には若干クる物があつた。

舞う様に刃は繰り出され、

踊る様にその体は揺れる。

最後の1匹の首を薙いだ和人は肩で息をしながら、その場に膝を付く。

びちゃつ、と鮮血を撒き散らしながら目の前に倒れ臥す、首なき猿型亜種の魔物。

吐き気すら催す光景に、和人は唯、呆然とする。

何故、こんなにも動けたのか、

何故、こんなにも闘えるのか、

何故、殺せたのか――。

疑問に疑問が重なり膨れ上がる中、彼に歩み寄る影が1つ。

手中から零れ落ちた村正は、地面に乾いた音を立てて落下し、そのまま跡形残らず消滅する。

無音の空間。

静寂の森。

沈黙の時間。

背後から回る腕は小さく、細い。

和人は驚きながらも、その腕を受け入れ、静かにその瞳を閉じる。

静寂と沈黙の空間に、彼女の声が響いた。

「良くやった……、カズヒト。」

「ご苦労じゃたの……、もう良いのじゃ――予想じゃが、お前は殺した事がないだろう。」

自らの手で、殺した事のないのだろう？」

静かに耳に届いた声に、和人は小さく笑みを漏らしてから頷いた。

「俺達の暮らしていた国じゃあ、殺したら犯罪だよ。」

殺「罪なんだ……、だから、殺すとか言う感情も抱けない」

そして首を横に二度振ってから、呟き続ける。

「俺は、俺には、殺せないのかもしれない……。――」

何も、冷徹に、心を殺して相手を殺しても、駄目だ」

悲痛な思いが、つらづらと口から漏れて行く。

「俺は――無力だ」

自嘲染みた呟き。

その日、和人が倒した出現した猿型亜種の魔物の数は、30前後。しかし、それでも彼の心を痛ませるのは、十分な数だった。

帰りの馬車の中でも、和人は喋る事はなかった。

唯、虚空を見詰め続ける。

寄り添うアリシアに時折視線を向けるも、小さな笑みを浮かべて終わる。

もし、あの時殺していなければ、どうだっただろうか？

もし、あの時殺さなければ、逆に自分はどうなっていただろうか？

もし、いや、もしも――あの時、闘わなければ、自分が殺されていた？

嗚呼――。

そして和人は小さく呟く。

「俺には、荷が重いよ――」

城に帰った和人は、真っ先に私室に向かい、ベッドに倒れ込んだ。
手に残る、村正の感触。

手に残る、村正であの魔物を斬った時の感触。

手に残る、肉を断ち、骨を砕いたあの感触。

殺すと言う、今まで持った事のない感情に身を委ねた時覚えた高揚感。

心を殺した時、そして相手を殺した時、視得たのは死体の山。
何れにせよ、心が歪む。

「……あ、」

殺さなければ生き抜く事は出来ない。

分かっているはずなのに――。

両手で顔を覆えば、静かに嗚咽を漏らす。

分かっているはずなのに、何故か涙が零れる。

分かっているはずなのに、何故か体が震える。

分かっているはずなのに、どうして、と心が叫んでいる。

「……ああ……、あ、あああ」

声が漏れる。

嗚咽が、唯漏れる。

どうして、嗚咽が漏れるんだろう。

どうして――。

その瞬間だった。

意識が薄れる。

視界が歪む。

何が――。

渦巻く意識。

そして彼の意識は、遠い遠い、空間へと飛ぶ。

「カズヒト……、居るか？」

まだ、彼は終われない。

「此处、は……？」

目を覚ますと、広がっていた景色に声が漏れる。

純白の、それこそ長時間居たら気が狂ってしまう、気持ちの悪い、
純白過ぎる空間。

と、

「よう、何情けない面してるんだ？」
声。

それはあの時、己の背を押してくれた声。

「お前、は……？」

「俺かい？ 俺はお前だよ。お前は『俺』だろう？」

『俺』と名乗る人物は、己の胸を親指で指して首を傾げた。

「俺は、『お前』……」

「嗚呼、此处はお前の意志と思考、感情で作られた世界さ。

何もないのは、あの時心を殺したから。全て消えちゃったのさ、
ま、直ぐに再構築されるだろうけど。で、何情けない面してるんだ
？」

ククツと漏れる笑み。

学生服がくらんを纏う彼は、ポケットに手を突っ込んだまま立ち上がり、

和人を見据え尋ねて来た。

「情けない面、か……、確かにそうかもしれないな」

「あ？」

首を更に捻る彼に、和人は告げる。

「俺は無力だったんだよ……」。

幾ら最強の力を得ても、主役になるって言い張っても、結局は無

駄だったんだ。

生き抜く為には殺すのは仕方無いって覚悟してたはずなのに……、殺せないんだよ……」

自嘲気味に呟いてはその場に崩れ落ちる。

「『お前』なら分かるんだろ……、俺の今の感情が……」

そのまま天を仰ぎ座れば、笑う。

「情けない気持ちで一杯なんだよ……」

そして片手で瞳を覆い、溜め息を吐く。

刹那――、

「ならお前はその程度の男だった、それだけの事だろう？」

振るわれる短刀。

刃が迫り、和人の首を薙ぐ直前で停止する。

「……ま、そうだな。お前は無駄に優し過ぎる。ま、温過ぎるとも言えるんだが」

短刀をひゅんひゅんと回し、刃をしまってから隣に腰を下ろす。

「俺は逆だ。お前の使われない行動原理、それこそ『殺意』やら『怒気』、『憎悪』やら何やらの集合体なんだが……、どうにも救われないお前の中に居たせいで俺まで救われない存在になっちまったみたいでな、やれやれだぜ、全く」

隣で紡ぎ続ける彼に、和人は尋ねた。

「なあ――俺に、殺せると思うか……？
これから先に待ち構える、全ての敵を」

数秒の間。

彼は静かに答える。

「どうだろうな。それはお前の意志次第だ。
俺は殺せないと思うぜ？ 多分だけだな」

数秒の間。

和人は苦笑し「そうか」とだけ答える。

そしてそのまま仰向けに寝転がれば「なあ」と投げ掛ける。
「ん？」

「どうして、殺さなきゃならないんだろうな……」

「さあな……、それは世界を作った神様にでもほざいてる。

この世は殺で溢れてる。だが、仕方なく殺すのもある」

肩を竦める彼に和人は「嗚呼、そうだろうな」と頷く。

「お前もそうだろう？」

生き抜く為に殺すんだろ？」

虚空を見ながら尋ねる彼に、和人は「嗚呼、俺は終れないんだ……」

……。あの国を救いたい、もっと、アリシアの笑った顔を見たいんだ……と、起き上がったのは呟く。

「それならその意志を示せよ。何逃げてるんだボケ。

お前は唯の偽善者なのか？ 違うだろ？ ちゃんとした意志と想いを持って闘うんだろ？」

終われないから、生き抜かなきゃいけないから殺すんだろ？」

その何処を否定する必要がある？ お前は偽善者じゃないんだ
つたら、その証拠を示すほか方法はない。殺す以外の方法を考える
？ 甘えるのも対外にしろよ？

あの世界で殺すから逃げる事は出来ないんだよ。なら闘えよ、正面の事から逃げようとするなよ。違うかよ、『俺』」

彼の瞳は、綺麗な水色だった。

視線は交錯し、静寂と沈黙が空間を支配する。

そして、

「く、あははははつ、……そうだな、そうだよな……」。

あー、俺らしくねえ、そうだそうだよそうですよ、何逃げてるんだよ、俺は」

苦笑しながら呟けば、和人は瞳を手で覆って拭ってから立ち上がる。

その瞳にもう、闇はない。

純粹な水色。

青年は此処で終われない、立ち止まらない。

だからこそ、戦い、闘い、殺す。

己の願いと望みと想いと意志の為に。

「邪魔したな、『俺』」

「いいや、構わん。話し相手が居なくて暇だったからな。

——……もう、忘れるなよ。今日、想った、呟いた、語った、綴った事を」

「嗚呼、分かつてる。

忘れない、お前の事も」

再び意識が揺れ、歪み、薄れる。

そして——途切れた。

第十話 掴んだ物は決意と想い（前書き）

さてさて、これにて第一部完！！

お疲れ様でした。

これより第二部始動！！

それと、この度のお話は一人称ですので、ご了承ください。
それでは第一部最終話、どうぞご堪能下さい。

第十話 掴んだ物は決意と想い

頭が痛い。

体が重い。

意識が戻っていた。

両手両足の感覚がある。

体が重い。

まだ重い瞼を開くと、目の前には、大粒の涙をぼろぼろと零しながら、服を掴んでは揺らしている、アリシアの姿があった。

どうして、泣いている？

湧いた疑問を解決しようと、俺は呟いた。

「アリ、シア……？」

名前を呼ばれた彼女は、肩を一瞬ビクンツと揺らすと、顔を挙げ、俺をその碧眼で見詰めた。

「カズ、ヒト……」

「嗚呼、……何で、泣いてるんだ？」

首を傾げて尋ねて見ると、アリシアは更に大粒の涙を零しながら、鼻を吸^{すす}り、しゃくり上げながら答えて来た。

「何度、引っ張つても、揺ら、じ、ても……っ、目、覚まさなかった、がら、っ」

涙は頬を伝い、はたまたそのまま直に零れ、俺の服を濡らした。

嗚咽混じりの声は紙一重で聞き取れた。

噛み砕いて説明すると、だ。意識が飛んでいた俺はどうにも死んだように眠っていたらしい。やれやれ……心配掛けてしまったな。

泣きじゃくる彼女の頭を優しく撫でてやりながら、俺は「悪い悪い、御免な？　ちよつと疲れててさ」とだけ謝る。もう1人の『俺』に出逢った事は告げないで置く。それでまた更に話がややこしくなるのは困るからだ。

「んう……、もう、大丈夫、なのか……？」

瞳を濡らし、頬を若干桃色に染めながら、彼女は顔を挙げて尋ねて来る。

「嗚呼、もう大丈夫——俺はもう、大丈夫」

己に言い聞かせる様に、二度に渡って言えば、彼女は柔和に微笑み「そうか」と呟いて、俺にそのまま身を委ねる。

時間が流れる。

静かに、緩やかに。

「のう、カズヒト……？」

静寂を打ち破ったのは、アリシアだった。

俺の胸に顔を埋めながら呼ばれた己の名に「ん？」と首を傾げる。

「あの時、妾は怖かった……」

同時に語り出されるは——己のあの魔物を殺した時のあの残虐非道なまでの殲滅風景。

「今まで幾多の戦争に顔を出して来た妾であっても、怖かった……」

「……」

俺は唯、黙って言葉を聞き入れる。

「もしかしたら、妾達も此处で殺されるのではなかるうか、と思った……」。

あの時のカズヒトは、鋭かった……、鬼神の様じゃった」

鋭い、か。

心を殺した結果、得た物は鋭さ、か。

心を殺した結果、得た物が鬼神と言う名の、称号、か。

笑えないな、ホントに。

自嘲気味に心の中で呟いていれば、更に言葉は紡がれた。

「じゃが、気付いた……、カズヒトは殺せない、と」

「……」

そう、俺はあの日、何も誰も殺せないと思っていた。

あの日、俺は自分が無力だと、感じた。

だが——、

「だがの、今のカズヒトは違う。」

何かを掴んだ様な、見付けて掴んだ様な目をしておる」
俺は終われない。

この世界では、殺すと言う事からは逃れられない。
この世界には、殺が満ち溢れている。

この世界で、殺す以外の方法を取るのなら、それは偽善。
確かに殺す以外でも救える——しかし、この世界には、殺す事
しか救えない物もある。

それを、『俺』に教えられた。

だから俺は今、彼女に自信を持って、こう言えた。

「嗚呼、見付けて掴んださ。」

まあ、中途半端かもしれない。出来損ないかもしれない。

それでも俺は掴んだんだ、答えを」

頷く俺にアリシアは微笑み「そうか……、なら良かった」と頷い
た。

「ああ、ホント良かったよ。」

——俺は、今までずっと甘えて来たんだって、あの日、漸く分か
ったんだ」

そして今度は俺が語る。

「俺の中に宿る『俺』。ずっと俺は『俺』に支えられて、背中を押
されて、気合を入れられて……。」

ずっと俺は『俺』の力を借りて、闘っていた。

ずっと俺におんぶに抱っこだったんだ」

彼女の服を握る力が強まったのが分かる。

応える様に、俺は彼女の背中に腕を回し、包み込む様に抱き締め
る。

「だけど、今日、決めたんだ。」

俺は、今日『俺』に語った全てを、綴った全てを、呟いた全てを、
想った想い全てを忘れず、それを強さにして闘うと」

きつと、俺の口から迸るのは、硬い決意を気合。

吼えるが如く、俺は呟いてから瞳を閉じ、告げた。

「——もう、逃げない。」

——終われない、俺は、闘う」

静かだが、硬い決意は静寂に木霊する。

風が窓から入り込み、抜けて行く。

「そして——」

嗚呼、気付かなかった。

「俺はこの国を、アリシアを護り、救う」

今宵は、こんなにも月が綺麗だったのか。

直後、顔を挙げたアリシアのその大きな碧眼から再び溢れるのは、零れたばかりの雫。

その雫をばろぼろと零しながら、

何度も何度も、頷いて、

呟かれた一言に、俺は救われた気がした。

嗚呼、俺の言った言葉は無駄じゃなかったんだな、と。

確かに涙を見た時点で救われた気もしたが、言葉が何よりも欲しかった。

一拍置いて、

「ありがとう……」

まだ、俺の道は途切れない。

例え、この道が血塗れようと、知った事じゃない。

それで救えるのなら……。

俺は、××だって、殺してやるさ。

第十一話 朝の物語、咲き誇るは真紅の華弁

「……」

翌朝――。

日課ではないが、和人を起こしに来たアルケスは部屋の扉を開けて、固まっていた。

気まずそうな、それでいて冷汗を流しながら固まっているのを見ると、何かいけない物を見てしまった小学生か中学生の様に見える。

いけない物、そう――例えば、両親の獣欲と愛情とほんの僅かな慰みの行為や、両親の喧嘩或いは好きな女子生徒に告白したが、振られてしまい呆然と立ち尽くす男子生徒――種類は様々だが、見てしまった者は気まずさ故に確かに冷汗は止まらなくなるだろう。

そう、今のアルケスと同じ状況に陥るはずだ。

そして次に出る言葉はきつとこれだろう。

「……見なかった事にしよう」

翌朝――アルケスが去ってから1時間後、先に目を覚ました和人は己の隣で眠るアリシアを発見し、アルケス同様、固まった。

「……」

言葉が出ない。

（待て待て、まあ待て、落ち着け俺。待て待て待て待て、待て待つんだ待つんだぞ俺、落ち着け、そうだ、深呼吸しろ、すううはああ

あ……、さて、昨日俺は何をした？

冷汗が滝の様に流れ出す。

そして彼の思考は昨日に向けられる。

昨日、結局己の胸の中で眠ってしまったアリシアに、和人は悩んだ。女の子に抱き着かれたまま眠られると言うのは初体験であって、彼も彼で必死に思考を働かせた。

どうすれば良い、と。

しかし、出た案は全てが彼女が離れてくれないと出来なかった故、却下。

で、消去法で導き出した結果が、今の状況である。

「そうだった……、忘れてたな」

頭を二三度掻いてから、上半身を起こし、ベッドから出る。

「今日も快晴快晴」

うんうん、と外を見て頷き、陽光差し込む窓の前で体を伸ばす。

体が伸びて行く感覚が、手に取る様に分かった。

「ふいい……、さて、と……、それじゃあ、ま、着替えますか」

こうして何時も通りの朝が展開されて行くのであった。

「良し……、って、まだ寝てるのか」

昨日とは異なる、黒いブイネックのシャツに、薄手の黒色のスラックスタイプのズボン。更に上から黒色のミリタリーコートと言う出で立ちの彼は、やれやれ、と肩を竦めつつ彼女の眠る目の前に椅子を置き、腰を下ろした。

「御姫様は案外寝ばすけなんだな……」

くつくつと笑いつつ、静かに眠り続ける彼女のその髪に触れ、梳く様にして撫でてやれば――、

「ん……、う」

その淡い桃色の唇から小さな声を漏らし、その深い、碧緑色の双眸を微かに開いた。

「あ、……、起こしちゃったか……」

あはは、と笑ってはその手を引つ込め、頬を掻く和人。

対してアリシアは、まだ現状を認識し切れていないのか、唯々、その瞳を擦ってはぱちくりとして再び擦りを繰り返している。

「……不味い時に起こしたな……」

人、いや、人でなくてもそうなのは分からないが——人間は中途半端な時間に起こされると完全に覚醒するまで時間が掛かる。それこそ、折角目覚めたのにそのまま寝てしまえば、二度寝となり、二度と起きなくなる可能性が高い。

現在彼女はその状況に陥っている。

それから約5分後「ふぁ」と完全に目を覚まし、体を伸ばした彼女は、ふるふると頭を振ってから、和人をはたと見詰め「お早うなのじゃ」と柔和に微笑んだ。

「嗚呼、お早う」

微笑み返し、挨拶し返せば「ふむ、取り敢えず朝風呂にでも浸かって着替えて来ようかの」アリシアはベッドから下り、そう呟いては頷いてみせた。

「だな、俺は別に良いけど」

「不潔だぞ？」

「一応今さっきシャワー浴びて来たんだけど？」

他愛無い会話から始まる朝は、こうして日常として幕を開けて行く。

同刻、帝政国家アルトレスタ。

積層都市としても有名な帝政国家アルトレスタは、中心に近付くに連れ、階段を上るかの様に高くなって行く仕様になっており、その中心であるう王城は、荘厳華麗克、空を貫く様に聳え立っている為に、雄々しくも合った。

初めて此処、アルトレスタに来た者は必ず王城を見ると、一瞬だけだとしても虜にされると言う噂があるが、あれは存外本当なのかもしれない。

風が通路を吹き抜け、王城にぶつかりと舞い上がり、空へと還る。循環染みた構造になっているのも特徴的で、理由としては至って簡単な物。風が吹き抜ける様に造る事で、炎の纏った弾丸や剣、矢は意味を成さなくなる。向かい風故にだ。通路通路で吹き込む風が違うが、中心に集まるに連れ、その風は速度を勢いを落とす。そして中央にて交わった風は立つ巻きめいた風を巻き起こす。それが原因となり、炎属性の付属された武器系統はその風の影響で炎をかき消され、意味を成さなくなるのだ。

炎がなければ城や街を焼く事は出来ない。

それに、此処アルトレスタではその風を味方に、風力のみで動かす事の出来る『風力進車^{エア・シコベット}』なる物を作り出している。

流石技術大国と言うべきなのか、それとも流石軍事大国、技術に關しては素晴らしいと褒めるべきなのか悩み所でもある。

——と、活気溢れた賑わう商店街を1人の青年が歩み抜けた。

摩く朱色のマフラーは、確実にこの世界の物で無い事を如実に示していた。纏っているのもまた、スーツの様な服装。軽装に見て取れるが、時折スーツの裾が風に揺れ踊る度に、隠しているのかは分からないが、腰にベルトに重なる様に巻いているホルスターに納められている黒き銃が物騒で危険な輝きを周囲に走らせている。

「やれやれ……、奈落の底から出て来れた、と思ったらこれかよ——」。

付いてないね、俺も」

青年は肩を竦めてから、変わってしまった帝政国家アルトレストに「時つてのは、相変わらず残酷だねえ」と嘆く様に呟いて見せた。「ま、歳が取れない俺にとっちゃもう時の残酷さ何てないのも同然なんだけど」

ポケットに手をつ突っ込めば、そのまま貴族の暮らす地区へと向かう。

――が、

「此処から先は関係者、或いは証明書、代行所がなければ通行は禁止されております」

「直ちにお引取り下さい」

槍を交差させ、道を塞ぐ男性と思われる門番二人に、青年は「あらら」と呟いてから「証明書かあ……、もう何百年も前に棄てちゃったなあ」と顎に手を添えた。

「何をブツクサ言っているのか分かりませんが、其処に居ては通行の邪魔で御座います」

「直ちにお引取り下さい」

「じゃあさ、女の子紹介するから通してよ。ね？ 硬い事言わずに、ね？」

「駄目で御座います」

「ちえっ」唇を尖らせて「ケチなんだから――それじゃあ力付くかな？」青年は口端を歪めた。

「何をするつもりか分かりませんが、我々に敵うとでも？」

「我々は精鋭の中の精鋭の門番。倒せるわけがないでしょう？」

やれやれ、と肩を竦める門番二人に青年は両手を大きく開いてから、天を仰ぎ、呟く。

「やってみなくちゃわからない。

さあ――平伏せ跪け、これが余の『デシットロード真紅霸道』である」

視界が、思考が——真紅に染まったのは、それから数秒後の事だった。

第十二話 宣戦布告と決闘と

午前11時半。

後1時間もすれば、商店街はその日一番の活気と熱気を迸らせる。はいつはいつ対して城内は至って静かで、逆にもう少し騒がしくても良いのではなかるうか、と言う程静かだった。

そよそよと風が廊下を吹き抜け、2人の髪を揺らした。

「そう言えばカズヒト、汝はこれからどうするのじゃ？」
「どうするって？」

敷かれた赤絨毯の上を歩きながら、和人は隣を歩いていたアリシアの口から漏れた言葉に尋ね返した。

「汝もそろそろ称号やら勲章、地位や領地、資金が欲しかろうと思つての。そこら辺はどうなのじゃ？」

「あー……、そう言えば全く考えてなかったな……」

額に手を当ててから溜め息を吐く和人にアリシアはクスクスと笑つて「然らば、妾が取り次いでやろうか？」と小首を傾げた。

「取り次ぐつたって……、称号やら勲章、地位は戦わない限り得られないだろ？」

それは領地も資金もそうなのだが、この世界には称号、例に挙げるとのならばアリシアの称号、それは氷と闇を扱う事から『闇結の氷姫』と呼ばれている。一種の二つ名と考えて貰えれば良いだろう――が存在する。

称号は得といった方が特であり、理由としては至って簡単で、今まで通り抜け出来なかった場所や、名前だけで顔パス、或いはその称号だけで物を得られたり、何て言うのもある。故に、称号は得といて損はない。

勲章も地位もそうだ。勲章はこの世界では名前の刻まれたバッジや、剣を貰う。地位は騎士の中でも別けられる第一騎士団やら第二騎士団に振り分けられるのだが、騎士団、と言う地位から抜け出す

のが事の外長く、抜け出した、としてもアリシアの様な称号を得られるか、と言われれば確率として薄い。アリシアはその膨大な魔力や、地位、攻撃力や、戦闘能力が常軌を逸している故に、瞬時にして見繕われた称号だ。地位無き庶民から成りあがりの、それこそ騎士団に入っても活躍が残せない様な兵士では称号どころか昇級すら難しい問題である。

現在の和人は『召喚された英雄』として名高いが、何れ違う場所に勇者や英雄が召喚されれば、そちらに話は傾き、和人はきつと召喚されただけの英雄になってしまう事だろう――、

「避けたい」

そう、それは避けたい。

折角この世界にやって来たというのに、何の功績も、傷跡も、戦歴も残せず、地位も名誉も資金も何も得られずに御伽噺の産物になるのだけは勘弁して貰いたい。

「それがの――」

アリシアがニヤリと笑みを浮かべ、これから説明しようとした、その瞬間だった。

「見付けたぞ、キサラギカズヒト!!」

と、言う、怒号に近い声が二人の耳を劈いた。^{つんざ}

「は？」

「へ？」

首を傾げて、その声の主の方に視線を向ければ――、

「げっ……」

と、下品な声を上げてアリシアは数歩後退り、和人の背後に身を隠した。

「くううう、貴様アツ!! 良くも……、良くも姫様の純潔をツツ――!!」

目の前でその白銀色の長い髪を掻き乱しながら、まるで火曜サス

ペンスの女優の様に叫ぶ男は、その血の様に赤い真紅の瞳を和人に向けて、

「決闘だ！！ 決闘しろ！！ 許さん、絶対に許さん！！」

「いやいやいやいやいやいや、話が全く見えて来ないですけど！？」

突如の宣戦布告に驚いた和人は、未だに身を隠しているアリシアに尋ね掛けた。

「どう言う事だよ、これ……」

アリシアは首を横に二三度振ってから嘆く様にして「分からぬ……、彼奴は勘違い男故、何かと勘違いしておるのだ」と溜め息を吐いた。

「その勘違いの対象が俺な訳ね……、最悪じゃねえか……」

同じく溜め息を吐く和人に、目の前の仕草が少々気障っぽい男は「何をこそそとオツ！！」と何故だか激昂していた。

「怒るな怒るな、怒ると血圧上がるぞ」

どうどう、と静めようとする和人に更に激昂した男は、再び髪を掻き乱しながら、見た目は綺麗で整えられた端整な顔を向け「良いな、今日午後１時。中庭の修練場にて待つ！！」と叫んでから、背を向け、かつかつと歩き去ってしまう。

取り残された２人は唯茫然自失と、そしてアリシアに至っては和人の服をぎゅつと掴んだまま硬直している。

「あのさ……、これ、行った方が良いのか？」

本日何度目か分からない溜め息に、アリシアは「行かなくては更に面倒になるぞ」と既に棄てた様子で背後から服を離し、現れた。

「ですよね……、どうしてこう、厄介毎に巻き込まれるんだ、俺は……」

「やれやれ、と肩を竦める和人に、唯々「巻き込んで済まぬ」と謝罪するアリシアだった。

「聞いたか、あの英雄と騎士団第一騎士のカルラ＝ルグ＝スウェー
ツアルト団長が決闘だよ」

「嗚呼、聞いた聞いた。見ないわけ、ないよな」

「その英雄の力、一度で良いから見てみたかったから丁度良かった
わね」

午後1時、昼食を取り終えた和人とアリシアを待っていたのは、
歓声で湧く中庭だった。普通、決闘と言うのはこう言った陰悪な成
り行きをやる物ではない。だがその成り行きを知らない見物人達は、
口笛を鳴らすわ野次を飛ばすで大変な騒ぎとなっている。

「来たか、英雄」

「英雄つて……、俺は如月和人だ。英雄じゃない」

首を振る和人にカルラ、と呼ばれる男はその純白の布を下地に、
赤と金刺繍の入った騎士服を靡かせながら「ふん、謙遜か？ まあ、
良い」と自己完結し「此处で貴様の首、貰い受ける！！！」と、確
実に殺意満々の言葉を口から迸らせ、吼えた。

「決闘なのに殺す気満々なのかよ……、ま、殺されなきゃ良い話だ
が……」

どう闘おうか、と頭の中で思考しながら立ち位置に着くと、審判
らしき男は両手を上げてから、天を仰いだ。

「これより、キサラギ＝カズヒト様、騎士団第一騎士カルラ＝ルグ
＝スウェーツアルト様の決闘を始めます！！」

ルールは無し、どちらかが降参するまでが勝負で御座います。そ
れでは——」

歓声は静まり、男の説明だけが中庭に響き渡る。

研ぎ澄まされた冷たい糸が、和人の全身を貫いて行く。

和人は手中に短刀を、

カルラは両刃剣を担ぐ形で、ピタリと構える。

静寂と言う名の緊張が2人の思考を、意識を早めて行く。

そして、

「始めええええええ！！！！！」

火蓋は斬って落とされた。

地を蹴ったのは審判の男が「開始」と言うのと同じだった。

沈み込んだ体勢から一気に飛び出し、地面ギリギリを滑空する様に突き進む和人に対し、カルラはその両刃剣の重さを感じさせない軽やかな足取りで駆け寄り、和人に迫る。

カルラの直前で体を翻し、捻り、短刀を左斜め上から叩き付ける。ひるがえ両刃剣の刃に迎撃され、激しい火花が散る。が、其処で攻撃は止まらない。コンマ数秒遅れで短刀を左手に持ち替えた和人は、そのまま左斜め下から斬り上げた。

が、それも刃で阻まれ、火花を散らす。この一撃は名刺代わりとも言う様に、和人は次の一撃を叩き込もうと重心を落とす——瞬間、

「は、アツ！」

鋭い気合と共に、尖った先端で突きの攻撃が放たれた。純白の光を引きながら迫る切っ先を、咄嗟に和人は顔を逸らす事で避ける。頬に掠ったのか、ひりひりと痛む。それに生暖かい感触もある事から、血が出ているのだらう、と認識した。

カルラは彼に立ち直る余裕を与えまいと、突きから重力任せに刃を振り下ろす。肩に迫る刃に一瞬恐怖を感じてから、思考を巡らせ、和人は一度バックダッシュし距離を取る。

一瞬一瞬が命取りの勝負の中で、和人は口元を綻はなばせた。
もしかしたら、自分は戦闘狂なのかもしれない。

闘う事で笑える何て可笑し過ぎる。自身に嘆息してから、和人は手前に引き、左手を前に突き出してから吼えた。

「さあ、……、もう一丁行くぜ!!」

ジェットサウンドめいた音が足元ですると共に、和人は地を蹴った。俊足、と言うには程遠いかもしれないが、この距離感ならばこの速度でも――、

「問題は、無いはずだ!!」

「何をゴチャゴチャと!!」

超高速での技の応酬が開始された。

彼の刃はカルラの刃に阻まれ、カルラの一撃を和人の刃が捌く。

2人の周囲では様々な色彩の光が連続的に飛び散り、衝激音と轟音が中庭の石畳を突き抜けて行く。

固唾を吞んで見守る見物人達も、唯手に汗握り、その2度と見れないかもしれないその決闘を目に焼き付けていた。

時折互いの攻撃が掠り、服を裂き、肌に掠る。

血液が色彩に混じり飛び散るも、気にしてはいられない。

和人の脳裏に、疲労により負ける、と言う負け方、或いは、疲労で勝った、等と言う勝ち方は微塵に浮かんていなかった。この世界に来て、初と断言出来る強敵を相手に、彼はあの今まで居た世界では味わえない加速感を感じていた。感覚が、神経が研ぎ澄まされ、更に速度が一段階シフトアップすると同時に、攻撃の速度も、威力もギアも上げて行く。

（まだだ、まだまだ!!　こんな良い勝負、そんな簡単に終わらせ
てなる物か!!）

全能力を解放して剣を振るう法悦感カルラにもあるのだろう。
笑みが浮かんでいる。多少は彼も笑っているのだろうが、それでもやはり可笑的い。

剣戟の応酬が白熱するにつれ、2人の息は荒れ、乱れて行く。

（決めるなら——此処——！）

その刹那、彼は全ての防御を捨て去り、呟いた。

「仕留めるか……」

同時、陸上の選手がスタートする様な姿勢を取った彼は、今までにない速度で駆け寄る。

カルラもまた、見物人達は驚き、驚愕に顔色を染める——が、それでも彼の姿を追おうと眼をやり続ける。

目を離せない最高の勝負——勝敗は。

「千極乱世——百景と散れ」

「全て返そう——？^{エス・テ・ランタ}刺突墜撃？！！」

視線は交錯し、

叫びは、声は、重なり、

——そして。

第十三話 報告は決着後、淡き白い結晶は少年少女を包み込み

衝撃音。

金属音。

轟音。

音と言う音が中庭を駆け巡り——代わりとでも言う様に静寂を齎^{もたら}す。

手に汗握りながら、もう2度と見れないであろうその接戦に接戦であつた決闘を固唾を呑んだまま見守る見物人達の喉が、緊張と静寂で干上がる。

誰1人としてまだ喋らない。

誰1人としてまだ口を出さない。

誰1人としてまだ歓喜も声も、歓声も上げていない。

——いや、まだ上げてはならないのだ。

「……」

「……」

交錯し、弾け、爆ぜ、相殺。

互いの放った技は無意味だつたのだろうか——いや、違つた。

短刀を持つ右腕を一杯に開いた形に残心を残していた和人の口に笑みが浮かぶ。

それはカルラも同じだつた。

両刃剣を突き出した状態で残心を残していたカルラもまた、口端を綻ばせている。

一体何が——直後、亀裂が走る音が中庭に木霊した。

その刹那、互いの武器はもう限界とでも言う様に綺麗に砕け散り、宙に白銀の光を散らした。

「く……っ、あ、はは、はははは、っ」

「ふ、は、はは、……ははははっ」

もう抑え切れない。

口から漏れるのは、笑み。

止められない。

抑え切れない。

「あ、ははははははははははっ！！」

「は、ははははははははははっ！！」

そのまま背中合わせになる様に座り込んだ2人は、同時のタイミングで呟く。

「「降参だ」」

こうして、彼等の決闘は引き分け、と言う形で幕を閉じた。

だが、2人はもしかしたらだが、勝利以上の物を手に入れたのか
もしれない。

それこそ、友情、と言う名の、好敵手関係を――。

「第七、偵察隊が、全滅——?!」

決闘を終えた2人は治療室のベッドで横に成りながら、偵察隊の隊長格と思われる女性に、衝撃的な事実を知らされた。

そんな馬鹿な、と言った顔で、首を横に振るカルラに和人は「な、なあ、その、第七偵察隊って、どれ位の強さなんだ?」と尋ねた。

カルラは首を振った事で乱れた髪をセツトし、直しながら「第七偵察隊は、偵察隊の中でも一位二位の強さを持つ部隊だよ……、それが全滅だなんて」と、眩き、それから、訳が分からない、どうして……、と言ってから肩を竦め、折角セツトした白銀の長い髪をガシガシと掻いていた。

「……」

和人は唯々、その眩きに啞然としてから、偵察隊の隊長格の女性に尋ねた。

「その、第七偵察隊を、全滅にした、奴の正体とかは、分からないんですよ……?」

「はい」女性は頷いてから「だが、分かった事が1つある」と眩き「偵察隊の纏っていた鎧、あれは魔法による攻撃の威力を下げる効果がある——だがそれが跡形もなく破壊されていた。無論、魔法以外も近接や銃撃の攻撃もきちんと防ぎます。鎧ですので……。ですが、それが破壊されていたんです」瞳を伏せ「と、言う事は——もしかしたら、なのですが、キサラギ様の様な超人的能力を持つ者がやったのかもしれない」と、肩を落としながら続けた。

「……、俺以外にも、この世界に召喚された奴が居る、って、言う事か、なのか……?」

告げられた言葉に、驚きながら自問自答する。

（待て……、なら、何故、俺を召喚した？）

——この世界に俺達よりも前に召喚された奴がどうしようもねえ奴だったからじゃねえのか？

（それなら、召喚したのは神様なんだ。神様ならその力を持ってその召喚された奴を引き戻す事だって、その召喚された奴の運命を捻じ曲げて無理矢理殺す事だって出来たハズだ）

——それならば何らかの理由でその召喚された奴が行動不能状態だった、とか？

（行動、不能……？）

——例えば事故で負傷した、とか。或いは捕まっていた、とか。

（……、その案はなかったな……。確かにそれなら合点が行く）

——神の奴はあの時、『この世界に主人公は居ない』って言うていやがった。つまり、この世界に既に居た奴は元主人公って事になるんじゃないかね？

（元、主人公……。成る程な、で、俺を代わりの、まあ一種の穴埋めとしてこの世界に召喚したわけか……）

——そう言う事だな。まあ詳しくは神の奴に聞く事だ。まあ他に考えられるとしたら……。何らかの理由で封印されていた、とか。この世界なら考えられねえ事じゃあねえ。

（封印……。大罪を犯したから封印、とか、踏み込んではない領域に踏み込んだから封印、とかか？）

——そうだな。まあ理由としては完全に某漫画に登場しそうな封印条件だが……。まあそれでも甘いだろうな。封印するならばもっと派手にやらないとならん。

（例えば……？）

——カニバリズム人喰しながら次々と国を滅ぼす、とか、或いは人体実験で数万数億って言う人間を使ったり、または……。

（あー、もう良い。怖い怖い。俺のが温過ぎたよ）

——だろうな。まあこの位派手にやらない限り封印は余り有り得ないと思うんだがなあ……。

（ふうん……、納得——まあ、後で神公に聞いてみるわ）

——それが良いだろ。ま、俺はそろそろ消える。

（消える？）

——嗚呼、俺もそんな長時間話してられねえんだ。て、事で、お休み。

（あ、おい——）

其処で意識が戻る。

そして自然と口から漏れたのは——、

「……、元、主人公、か」

「え？」

「いや、何でもない」

隣で「何かあるのなら言つといた方が良いよ」と呟いているカルラをスルーした和人は苦笑してそう告げてから、そのままベッドに倒れ込んだ。

元から居た、それこそ主人公。

自分とは違う、物語を組み立てる柱となる人物。

それが居るのなら、逢つて見たい。

逢つて、話して見たい。

逢つて、聞いてみたい。

逢つて、闘つてみたい。

闘争本能だろうか——己より強い、それこそ物語を組み立てる柱となる主人公が目の前に居て、挑まずには居られなくなる。

そんな主人公を超えなくなる。

「……はは、我ながら戦闘狂だな……」

人知れず内に呟かれた台詞は、虚しく治療室に響き渡ったのだった。

「やれやれ——此処も終わり、か？」

閑寂な帝都の裏路地に、時間帯には似合わぬ少年の声が響く。

「年齢を三歳も戻すと動けるもんだね。

まさか某ゲームの殺人鬼同様の動きが出来る何て思いも寄らなかった」

醜悪な光景の中、可笑しそうに笑う少年の姿は、狂悪その物。

「それにしても……、どうして此処の連中は少女を狙うんだか……」

肩を疎める彼の視線の先には、胴体と腰で分断された半分獣、半分人の種族の生物の死骸が転がっている。

飛び出た五臓六腑は、周囲に散らばっており、少年の頬や纏っている黒衣にもその飛び散った肉片がこびり付いている。

「ま、服が汚れたけど、良かったんじゃないの」

カシユン、と短刀の刃を納め、笑みを零した少年は、視線の先の先、それこそ隅に蹲り、怯えた様に震え続ける少女の元に歩み寄る。髪の中に見得た、その耳で分かるが、彼女もまた半獣人だ。尻尾もまた、ひよこひよこ顔を出しては震えながら揺れている。

少年はクスクス笑いながら彼女の正面まで歩み寄り、腰を下ろしてから尋ね掛けた。

「大丈夫？」

彼女は顔を上げない。

「君の友達は、僕が救ったから。大丈夫だよ、怪我はなかった」

ぴくり、彼女の猫耳が反応し、動く。

「君も怪我はないね……？」

良かった——あのままだったら確実に犯されてただろうからね……、ホント、半豚男達って見境ないよね」

やれやれ、と溜め息を吐き、少年は彼女の頭に手を乗せ、神を梳く様にして撫でてやりながら「でも、もう大丈夫だから」と囁いた。

彼女が顔を上げる。

淡い真紅の瞳には、大粒の涙が溜まっている——相当怖かったのだろう、涙はそのまま溢れ、零れ続けている。

「よしよし。怖かったね……」。

君の家は？ 送り届けるから」

優しく、それこそ先程の殺す事を快楽として得ていた狂喜染みた

笑みとは違つ、柔らかな笑みに彼女は涙を拭い、しゃくり上げてから
「家、ない……」と呟いた。

「家がない？
どうして？」

少年は首を傾げて、尋ねる。
彼女は静かに答えた。

「ママ、が……、死んじゃつ、て……つ、パパも、せんそー、で……
っ、だ、から、誰も、居なくて……。
怖くて、……、寂しく、て、……っ」

嗚咽混じりの呟き。

嘆く様に、それでいて寂寥感籠った言葉に少年はその真鍮色の瞳
を細めてから、再び優しく微笑い、こう呟いた。

「なら、僕と一緒に来るかい？」

言葉に彼女は顔を上げる。

視線が交錯し、数秒沈黙が訪れる。

未だに頬を伝う涙を気にも留めず、しゃくり上げながら「良い、
の……っ？」と首を傾げる彼女に少年は「勿論」と頷く。

嗚呼、何てお節介。

嗚呼、何てお世話。

嗚呼、何て大馬鹿。

——だけど、

（主人公に選ばれる奴って……、大体そう言う奴^{バカ}ばかりなんだよ
な」

苦笑し、肩を竦めてから「どうする？」と首を傾げる少年に、彼女はぶわっ、と更に滝の様に涙を零しながら俯き、顔を真っ赤にしながら「着いて、く……っ」と頷き、そのまま少年に飛び付いた。

「おつとと……、良し良し……」

飛び付いて来た彼女を難なく抱き留めた彼は、そのまま包み込む様に抱き締めると、震え、競り上がる背中を優しく撫でてやりながら、建物の壁に背を預け座り込んだ。

「え、え、ふ、ええ……っ、ああ、……っく、……、ふえええ、……っ」

声を上げて、泣き続ける彼女に今出来る事は、声を掛けて励ます事よりも、慰めてやる事よりも、もう大丈夫だから、と言ってやる事よりも、静かに、唯々抱き締めて、その背中を撫でてやる事。

それしか出来ない——いや、それが一番だろう、俺も昔そうだった、と思ひ返す様に。

少年は唯、当時やられた事をそのまま彼女にやってやる——。

（そうだな……、戦争は——俺の手で、消し去ってやらないと、な——）

閑寂な路地裏は、彼女の泣き声と、少年の白い吐息に埋め尽くされ——、

（雪……）

降り始めた、淡い白いこの時期を象徴する結晶が支配し尽くしたのは、和人とカルラの決闘から、数時間後の事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5032z/>

エンドレス ストーリー — 『もし』 —

2011年12月24日00時48分発行